

令和元年度
静岡県立大学短期大学部

F D 委員会報告

I 令和元年度FD委員会活動について

1. 1 令和元年度FD活動の基本方針および活動実績

FD事業本来の目的に立ち返るといふ基本方針のもと、PDCAの手法を視野に入れてFD活動の全面的なチェックを行い、継続的な事業の実施と新たな取り組みに関する検討を行った。

内容としては、以下のとおりである。

- ・FD講演会
- ・授業評価アンケート
- ・授業参観・授業公開
- ・FD新任者研修
- ・図書館へのFDコーナーの設置
- ・委員会の開催方法についての新たな試み

以下にその詳細を報告する。

1 FD講演会

第1回短期大学部FD講演会

(全学FD委員会・短期大学部FD委員会・健康支援センター共催障害学生支援講演会)
令和元年7月18日(木)16時30分～18時00分

講師：京都大学 学生総合支援センター 障害学生支援ルーム
高等教育アクセシビリティプラットフォーム
特定准教授 船越高樹先生

演題：「教職員みんなで取り組む障害学生支援」
～実習時の支援・成績評価のポイントをおさえつつ～

第2回短期大学部FD講演会

(全学FD委員会・短期大学部FD委員会・健康支援センター共催障害学生支援講演会)
令和元年11月27日(水)16時30分～18時00分

講師：富山大学 保健管理センター 准教授
教育・学生支援機構 学生支援センター副センター長
アクセシビリティ・コミュニケーション支援室長
西村優紀美先生

演題：「学外及び学内実習における合理的配慮」～考え方と支援の実際～

※第3回短期大学部FD講演会は、令和2年3月10日(火)に、演題：疫学・統計の基礎(仮題)で開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の防止のため、開催を見送った。

第1回及び第2回の講演会は、全学FD委員会・短期大学部FD委員会・健康支援センター共催障害学生支援講演会として開催された。

第1回は、小鹿キャンパスの参加者が57名。同時中継会場の草薙キャンパスの参加者が25名であった。第2回は、小鹿キャンパスの参加者が56名であった。

アンケートの結果から、講演内容に対する評価が高いと考えられた。関連のテーマを継続して学びたいといった意見も多くあった。

例年、2回開催されている短期大学部FD講演会であるが、本年度は、2回が、健康支援センターとの共催で、障害学生支援講演会として開催された。そこで、第3回講演会として、短期大学部と全学FD委員会の共催として、例年よりも1回多く開催することを予定した。しかしながら、第3回の講演会は、新型コロナウイルス感染拡大の防止のため、開催を見送ることとなった。

2 授業評価アンケート

学生による授業評価アンケートの実施は、平成20年度までは自己点検・自己評価委員会が、平成21年度のFD委員会発足後当委員会が行っている。本年度も従来どおり前期及び後期の教員（専任教員と非常勤講師）が、授業終了前2週間の授業期間内で、担当科目の授業終了15分前に実施した。

また、原則として教員単位で授業アンケートを実施し、集計結果を各教員（専任教員と非常勤講師）に配布した。

3 教員相互の授業参観・授業公開

昨年度より、授業参観・授業公開の方法について、学科それぞれの実態に沿った方法や内容での実施へと見直すこととしていたが、今後は授業見学について、授業見学を希望する教員は、授業担当教員にメール等で問い合わせをして了解が得られれば、授業見学を実施するという方法で行うこととした。

4 FD 新任研修

この事業は当初、教育現場での経験に乏しい医療系の助教を想定して始められたものであった。現在は新任教員に対して、総務室がオリエンテーションを行っている。それに加えて、新任教員が勤務を開始するにあたって、不明な点があれば、新任教員は、自分の所属する学科等のFD委員に問い合わせをして、FD委員はそれに対応することとした。

5 図書館へのFDコーナーの設置

教員一人ひとりにFDに関心をもってもらうことを目的として、今後、定期的に図書館にFDコーナーを設置し、内部質保証、教学マネジメント、IR(Institutional Research)等に関する図書を展示するといったことを、図書館・紀要委員会と協同であたることとした。

6 委員会の開催方法についての新たな試み

本年度は、委員会を可能な限りメール会議にて開催した。メール会議は、教職員の移動時間の削減や、ペーパーレス化につながり、SDGsにも寄与している。しかしながら、対面での審議が望ましい案件もある。今後も対面の会議とメール会議を併用することとした。

本年度は、年度末に新型コロナウイルス感染拡大防止のため、遠隔の会議が推奨される状況となった。本委員会は、その時点において、すでに、メール会議の手法が定着していたことから、結果として、スムーズな対応につながった。

7 「FD活動報告書」の編集発行・公開

授業アンケートの集計が納入されてから、下記の内容で報告書を作成する。これまでどおり、①紙（冊子）②DVD（CD-R）③WEBの3種の媒体を作成する。

- ・授業評価に対するフィードバック
- ・授業評価アンケートの現状と課題
- ・授業参観・授業公開の現状と問題点
- ・各種事業の実績報告

本委員会報告書は、授業評価アンケートのフィードバックを含むため、翌年度に前年度委員が作成・公開している。

6 委員会開催回数

7回

II 学生による授業評価アンケートの実施方法および教員のコメント

1. アンケートの実施および教員にコメントの作成について

1. 1. 授業評価アンケートの実施方法・内容

学生による授業評価アンケートの実施方法・内容は、平成 23 年以降変更していない。実施方法は次の通りである。

①アンケートの実施時期は原則として「最終授業時またはその前週授業時」とした。

②アンケート用紙の配布は教員が行う(原則として授業終了 15 分前)。

③アンケート用紙の回収は学生室が行う。教員が用意した封筒にアンケートを入れ封緘し学生が学生室に提出する。

④学生室は質問項目ごとの集計及び自由記述欄のワープロ打ちを外部業者に委託する。

⑤業者から納品された④の教員個々のアンケート集計と自由記述をワープロ打ちしたものを封筒に入れ、FD委員会から各教員へ配付し、「教員によるコメント」の執筆を求める。

⑥上記①～⑤は、本学専任教員および非常勤講師の担当科目をアンケートの実施対象とする。但し、現段階では非常勤講師の場合は、協力依頼とする。

⑦担当科目のうち、アンケート実施時に受講者が 5 名以下の場合は回答者が特定される可能性を回避するため、アンケートは実施しない。

⑧オムニバス方式等、複数の専任教員で 1 科目を担当する場合、アンケート用紙はシラバスの科目担当筆頭者に配布する。

⑨非常勤教員と専任教員で 1 科目を担当する場合は専任教員がアンケートを実施する。

1. 2. 授業評価アンケート用紙

平成 30 年度のアンケート用紙(次ページに掲載)は、平成 19 年度後期から導入したマークシートを使用した。「I 授業のあり方」、「II 教え方」、「III 総合評価」、「IV あなたの取り組み方」及び教員が自由に質問項目を設定できる「V 自由項目」の大項目の下に小項目とし 19 (各教員が設定することができる自由項目を含む。)の質問が提示されている。

学生による評価は、各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの 5 段階によって行なわれる。自由記述欄は、「良いと思ったこと、感心したこと」、「改善してほしいこと、付け加えてほしいこと」、「その他、この授業についての意見、感想等気づいた点があれば書いて下さい」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生の意見、感想、要望等を具体的に述べられる内容となっている。

1. 3. 教員によるコメント作成方法

教員はアンケート結果を踏まえて、「教員によるコメント」を作成する。

その他の作成方法も含め、実施要領を作成し非常勤を含め全教員に配信した。

1. 4. 公表の目的と方法

上記は「教員によるコメント」として『令和元年度FD委員会報告』に記載し本学 web 上に公表する。

公表の主要な目的は、教育の根幹である授業が広い公共性を持つこと、およびその費用の大半を県費で賄っていること、この点に起因する公開責任と説明責任からである。本学で今年度行なわれた授業についての学生の評価に対して、教員がどのようにそれを受け止めて改善しようとしているかを報告書として可能な限り公表し、本学に課せられた社会的な責任の一端を果たそうとするものである。

2. 教員によるコメント

以下に、アンケート結果に対する教員によるコメントを載せる。掲載順は以下の通りである。

i) 専任教員

①一般教育等、②歯科衛生学科、③社会福祉学科社会福祉専攻、④社会福祉学科介護福祉専攻、⑤こども学科（学科等、専攻の中は職位順、職位の中は五十音順）

ii) 非常勤講師（五十音順）

学科・専攻：一般教育等 職名：教授 氏名：鶴橋俊宏
対象科目：言語と表現（講義）

昨年度の報告にも書いたが、「言語と表現」は「人間理解」に置かれているように、人間の思考およびコミュニケーションと、言語との関係を理解するための科目である。ここ数年は、「定義」「分析」の二つを軸に展開している。本年度も同様である。これらは論理的な思考の基礎であるが、正確に把握されているとは言えない現状を危惧していることによるものである。ただし、単なる「言葉の意味」を解説するのではなく、ことばによる論理を言語の本質・仕組みに触れつつ講義を進めている。

独自のテキストを編み、全ての学生が同じスタート・ラインに立てるように工夫している。医療福祉系の学生にとっては扱う対象がかなり抽象的と思われるので、できるだけ実生活に即した話題を取り上げ、受講学生と対話しつつ双方向の講義を行うように心がけている。この点は開講当初より高い評価を得ているが、受講者諸君の積極的な授業参加に負うところも大きかったと思う。

レトリックにも力を入れたが、その理解度を確かめる機会を十分に得なかったと思う。この点を来年度の課題とする。

ことばの運用能力はフィジカル・トレーニングに似ている。

学生諸君には、授業外でも教員の専門知識・知見を活用すべく機会をとらえてほしいと思う。

学科・専攻：一般教育等 職名：准教授 氏名：林恵嗣
対象科目：体育実技（実技）、健康科学論（講義）

【体育実技】

授業の目的・目標は、1) 学生が将来的に運動を継続していく意欲を持つようにすること、2) 体力を維持・増進させること、そして、3) 気分転換を図ること、等である。これらの目的・目標を達成するために、施設・設備面や安全面を考慮した上で、学生が希望した運動（スポーツ）を行った。学生が希望する種目を選択するのは、学生がより主体的に授業に取り組むことができると期待するためであり、実際に積極的に取り組む姿勢は見られている。

また、夏季においては、熱中症を防止するために運動強度が高くない種目を実施するようにし、休憩時間を多くとるようにしている。

授業評価アンケート結果では、ほとんどの項目で学科・専攻平均点を上回っており、良い評価が得られたと考えている。

これまでも同様に取り組んできて高い評価を得られていることから、今後も継続していきたい。

学生へ期待すること：授業の中で説明できること・教えられることには限界があるので、自分から調べたり、教員や上手な人・詳しい人に聞いたりするようになってほしい。また、授業でも話をしたが、身体を動かすことが心身の健康につながるため、授業外でも積極的に身体を動かすようにしてほしい。

【健康科学論】

授業の目的・目標は、1) 健康と運動の関連性についての理解を深めるとともに、安全かつ効果的に健康の維持・増進のために運動を行う方法を理解すること、2) それを理解するために必要な知識（主に生理学的な内容）を学ぶこと、である。

選択科目であることから、歯科衛生学科の履修人数は少ないが、その分、授業内容に関する興味を持っていたと考えられ、それによって授業に対する評価や満足度は高くなっていると考えられる。社会福祉専攻・こども学科における授業評価は、昨年度より低くなったが、それ以前（平成29年度）よりは高くなっている。

平成30年度から授業内容を少しコンパクトにしたことで、授業評価は改善されている。授業内容は定期的に見直す予定であるが、年度による評価のばらつきがどの程度あるかも把握してから考えたい。

学生へ期待すること：授業内容が分からなかった場合には、まずはしっかりと復習をしてほしい。また、遠慮なく質問をしてほしい。授業時間外でも対応します。

学科：一般教育等 職名：講師 氏名：有元志保
対象科目：英語（演習）

本科目では、人間の環境とのかかわりにおける課題と、持続可能な社会づくりの取り組みについて、文章と映像を通じて学ぶ教材を使用した。基礎的な英語力の向上とともに、環境問題への関心や広い視野を養うことを目指した。

授業では、口頭と板書により丁寧な説明をこころがけ、学生同士のペアワークによって文章を音読したり、日本語で解釈したりしてもらいなど、発音や内容理解に不明な箇所が残らないよう努めた。また、英語の音に慣れるよう、字幕も利用しながら映像を繰り返し視聴した。

知識の定着の一助として、テーマに関連する画像や映像、記事など、インターネット上の情報も活用した。

授業評価アンケートや、定期的な実施したテストの結果からは、概ね目標が達成できたと判断できる。

本年度はグループワークの成果を、学生が相互に評価する試みを行った結果、意欲的に取り組む受講者が増えたという印象を持っている。今後も学生が学ぶ意欲を維持できるよう、能動的な授業参加を促す働きかけの方法を工夫していきたい。

学科・専攻:一般教育等 職名:講師 氏名:上田一紀

対象科目:情報処理演習(演習)、情報の活用(演習)、情報と生活(講義)、現代社会学(講義)

[情報処理演習]

本科目の到達目標は、PCの基本操作、PCを用いた文書作成、データ処理(表計算、グラフ作成)、インターネットの利用、プレゼンテーション資料の作成を行えるようになることである。

基本・基礎の習得に重点を置き、難易度を低めに設定したつもりだったが、特にExcelについては、もう少し簡単な内容にしてほしい、進み方が速い、などの意見があった。一方で、内容が簡単である、授業進度が遅い、という声もあり、各々の学生の習熟度に合ったサポートが必要だと感じた。また、課題についても難しいという意見があったため内容・分量に関し、再検討したい。

[情報の活用]

本科目の到達目標は、クラウドコンピューティングシステムをPCとスマートフォン(複数端末)で活用できるようになること、情報の活用(情報の収集、編集、発信)に関する技法を習得し、コミュニケーションツールとして使用できるようになることである。とりわけ、1年次開講の「情報処理演習」で取り上げなかった情報機器・情報システムの活用方法(例えば、画像編集ソフトを用いた合成画像の作成、データベースの利用等)について、実際に手を動かしながら学ぶということをコンセプトとしている。

本科目についても難易度を低く設定したつもりだったが、機器の操作が難しく感じた受講生もいたようである。そのため、この科目についても各々の学生の習熟度に合ったサポートが必要だと感じた。

[情報と生活]

情報機器(コンピュータやスマートフォン)やネットワークシステムの基本的な仕組みや特徴を理解すること、情報セキュリティや情報倫理を考える際の基本的な枠組みを理解すること、情報の法(情報法、メディア法)の基本を理解することを目的としている。

[現代社会学]

社会学的な考え方を身に付けること、社会学の基礎知識・代表的な理論を理解すること、社会学的思考を日常の出来事や現象に適用できるようになることを目的としている。

これら2つの講義に関しては、毎回、冒頭に前回の講義のおさらいを行い、受講生に前回の内容について質問している。それ以外にも、受講生の考えや意見を述べる機会を

毎回作っている。また、受講生の理解を促すため、その回のトピックに合った動画を流したりしている。

内容に関しては、難しかったという意見もあったが、使用する教材(配布資料やPPT、動画)については、わかりやすかったという意見が多かった。また、いずれの科目も少人数であったため、学修に関して細かな部分までサポートすることができたと考えている。

学科・専攻：一般教育等 職名：講師 氏名：高田佳輔
対象科目：データサイエンス入門（講義）

筆者の対象科目の授業評価アンケートの集計結果については、次の通りである。

まず「授業のあり方」・「教え方」・「あなたの取り組み方」において、平均点が学科・専攻平均点を上回った。本科目は、学生の大半が初めて学ぶ内容であり、毎回必ず課題を課す形式を採用しているが、上述のように評価ポイントにおける平均点は比較的高めになっている。この背景には、本科目においてゲーミフィケーションの仕組みを取り入れた結果であると思考する。

ゲーミフィケーションとは「目的が明解」であり課題を行なったら必ず評価が得られることや「ユーザー（学生）間で交流（教え合い・相談）が可能」などの特徴を持つことでユーザーが楽しみながらモチベーションを維持しつつ目標に向かって進むことができるゲームのような仕組みのことを指す。

まず対象科目では、毎回の授業の冒頭で必ず「今回のゴール」を提示するようにしている。これにより学生は、自身が当該回の授業の重要なポイントをきちんと理解できているかを確認できるようになっている。

次いで、対象科目では課題を出したら、必ず次回の授業冒頭で評価を行うこととしている。この評価システムを採用することによって、学生からは「いつもよく出来ているねといって下さり頑張ろうという気持ちが増した。おもしろかったです（原文ママ）」という意見が得られた。

さらに、対象科目における工夫としては、授業内で1つの分析手法について紹介を行った際は、その直後にその分析手法を実際に学生が実践できるように授業を展開している。これにより、学生は知識と技能をすぐさま結びつけられるようになっていると考える。次いで、学生が授業内で課題に取り組む時間において、学生には席から立ち上がって、他の学生と相談や教え合いをすることを推奨している。

これにより教える側の学生は、得た知識や技能を他者にレクチャーするという授業への理解をいっそう深めるような経験が得られることや、相談をすることで解決をしなかった場合は、2人（もしくは複数人）で教員に質問をすることができ「授業中に教員に質問をする」という行為への心理的障壁を下げる効果があったと考える。実際に、学生は課題の評価が毎回得られるということもあり、学生同士の教え合いや相談の頻度は比較的高く、教員への質問も頻繁に行われた。

次いで、「総合評価」については学科・専攻平均点より、僅かに数値が下回る結果となった。この結果については「この授業の内容はよく理解できた」の項目の数値が低いことが一因として挙げられる。上述の通り、対象科目は、学生の大半が初めて学ぶ内容であり、授業内容の理解や、PC スキルの必要性など複数の能力が求められる比較的高い授業内容となっている。

文章作成ソフトや表計算ソフトなどをほとんど使用したことのない学生も多く、そのスキルの修得も求められたため、上述の結果となったとも考えられる。

学生からは、「最終課題が難しすぎました(原文ママ)」というコメントがあった一方で、「やっている内容が分からないという時もあったが、全体的に楽しめた授業だった。まとめ方の見本が、毎回与えられて課題を進めやすかった(原文ママ)」などのコメントが得られた。

今後については単に授業の難易度を下げるのではなく、授業内容はそのまま学生が難しいと感じるポイントについて、説明をいっそう丁寧に行うなどの工夫をすることで、総合的な理解につなげたいと考える。

以上を要約すると、筆者が担当する科目においてはゲームのように楽しく目的が明解で、課題を達成したらすぐさまフィードバックが得られ、他者とも協力できるような授業形態をとることで、学生が楽しみながら学べる授業を展開してきた。

今回の授業評価において、授業の形態については概ね良好な反応が得られた一方で、最終課題や授業内容については内容が難しすぎるという指摘も一部あったため、今後は学生が難しいと感じた箇所の説明をいっそう丁寧にすることや課題の取り組み方の例をさらに詳細に提示することによって、学生がストレスなく授業に取り組めるように工夫を行いたいと考える。

学科:歯科衛生学科 職名:教授 氏名:有泉祐吾
対象科目:病理学(講義)、歯科材料学(講義)、口腔病理学(講義)、
歯科保存学(講義)、災害時歯科保健(講義)、救急処置法(講義)、
歯科材料学実習(実習)

すべての担当科目は、歯科衛生士教育における専門科目であることから、講義科目においては、それぞれの科目での必要最低限の知識を修得させることを、実習科目においては、講義科目における基礎的知識の理解度をさらに深化させることを目標として、今年度もブラッシュアップを行い実施した。また、ここ数年、学生間での授業内容の理解度における差異の拡大傾向が窺え、さらに、そのような学生数は年々増加傾向にあり、学生間の理解力や学力の差が拡大しているように思われる。この差を埋めるべく授業の改善は必須で、毎年度行っているつもりではあるが、いまだ足りずということで、大いなる反省点だと考えている。しかしながら、個人の検討では難しい点も多々あり、根本的な原因がどこにあるのかの検討は、しかるべき機関での検討も期待する。

一方、実施機関においては毎年度十分なる検討の上に、この授業評価アンケートを実施していると考えるが、このアンケートを実施し、単に教員にコメントをださせることが目的になっているように思えてならない。継続は大事であろうが、それにも増して検証、検討は大事だと考える。

現状のような個人対応だけではなく、組織としての対応も必要だと思われるが、実施機関における考えが全く見えず、何のために行っているのかを含め、組織としての検討結果を、また組織としてこのアンケートをどのように有効活用していくのかを、今一度検討すべき時期に来ていると考える。

学科：歯科衛生学科 職名：教授 氏名：仲井雪絵

対象科目：①臨床歯科医学序論（講義）、②小児歯科学（講義）、③口腔発達学（講義）、④口腔衛生学Ⅰ（講義）、⑤口腔衛生学Ⅱ（講義）
⑥臨床歯科診査法（講義）、⑦救急処置法（講義・教員3名で分担）
⑧臨地実習Ⅲ（実習・学科全教員で分担）

I 授業の目標・工夫

優秀な歯科衛生士を輩出するために、日本一の教育を本気で目指している。

歯科衛生士国家試験の合格は教育目標の最終ゴールではなく通過点に過ぎない。Advanceな内容を教授しながら、出題傾向を分析した上で過去問を練習問題として單元ごとに与え、解説を行い、理解度を確認している。すなわち自然に国家試験対策も網羅できるよう工夫しつつ、臨床現場で実践に生かせるよう「知識」を「知恵」として修得させることを念頭に置いている。実際の症例の豊富な口腔内写真やエックス線写真等を視覚素材として使用し、臨床を具体的にイメージさせるよう努めている。

授業内容は、コアカリキュラムを意識しつつアカデミックフリーダムとして歯科界での最新トピックを盛り込んだ。毎回配布資料を作成し、穴埋め形式で授業中に記載させる方法を採用している。またアクティブ・ラーニングとしてミニッツ・ペーパーを導入し、学生の解釈モデルを確認し、自分の授業に臨機応変にフィードバックして質の向上に努めている。

2017年度より、日本の歯学部における医療面接教育のトップレベルの研究者・教育実践者（医療系大学間共用試験実施評価機構委員）を招聘し、本学科において日本で最先端の歯科医療面接および動機づけ面接法の学修機会を実現化している。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケート集計結果を供覧すると、「I 授業のあり方（5点満点）」は①4.63、②4.91、③4.72、④4.75、⑤4.72、⑥4.83、⑧4.79
「II 教え方（5点満点）」は①4.63、②4.91、③4.72、④4.75、⑤4.72 ⑥4.83、⑧4.79
「III 総合評価（5点満点）」は①4.53、②4.91、③4.62、④4.64、⑤4.68、⑥4.62、⑧4.77であった。これらの評価はまずまずの結果だが、満足してはならない。

講義スライドは前年度のものをそのまま使用することなく、常にアップデートしている。

すべての担当科目において各講義回の2週間前までに該当する配布資料を学務システム（UNIVERSAL PASSPORT）にアップロードし、学生の予習に役立つ努力をした。来年度は学務システムの機能をさらに活用し、課題管理によって双方向性の教育指導に着手する予定である。現在紙ベースで実施しているミニッツ・ペーパーをデジタル化して効率化できないものか、検討している。

⑥の臨床歯科診査法の授業コマの中に模擬患者参加型の Motivational Interviewing（動機づけ面接法）の講義と演習を導入した。そのファシリテーターとして、引き続き歯学部教育における共用試験機構の医療面接教育で名高い教授陣を外部講師として招待する予定である。

Ⅲ 学生に期待すること・学生への要望等

学校で教わることが、あなた方の学ぶべき全てではありません。未知なるものに対して謙虚に食欲に勉強する積極性を失わないでください。

自分が一度も見聞したことも使用したこともないものを根拠無く批判するような「食わず嫌い」にはならないでください。また、無批判で全てを受け入れないでください。

批判的吟味する判断力を常に忘れず、その上で良いと判断できるものを即受け入れる柔軟性を養っていただくことを期待しています。

学科：歯科衛生学科 職名：教授 氏名：吉田直樹
対象科目：生化学(講義)、口腔生理学(演習)、口腔微生物学(講義)、
微生物学(講義)、歯周治療学(講義)、歯科衛生統計学(講義)

I 授業の目標・工夫など

歯科衛生学科の学生は、卒業すると、「短期大学士」の学位とともに「歯科衛生士国家試験受験資格」を取得する。

授業においては、全ての学生が国家試験に合格するために必要な知識を確実に伝え、十分に理解させることを、目標としている。要点を示して、簡潔に伝えることを心がけている。

しかしながら、講義においては、単に教科書に記載されている知識を与え、学生は、それを得るということに留まらないようにと考えている。いわゆる詰め込み教育となってしまうのは、学生が「自主的に学ぶ」という機会を奪ってしまうことになり、将来、「受け身」の姿勢で学ぶことから抜け出せなくなってしまう恐れがある。学生は卒業後、学問を続けて行くこととなる。本学に在学している時間よりも卒後の時間の方がはるかに長い。したがって、学生ひとりひとりが、短期大学において「学問をした」という実感を卒業後も永く持ち続けられるような内容の授業を行いたいと考えている。日常の授業において、学生ひとりひとりが「自分は学問の場に身をおいている」という実感を持てるようにすることを心がけている。学生自身が「学問」をしているということを感じられること。つまり、それぞれの科目が、学問としての体系を有していること、先人達の研究によるエビデンスの蓄積が教科書に記載されているということ、そして、それは現時点のものであって、将来的には変化して行く可能性もあるということを理解させるように努めている。

授業を理解しやすくする工夫としては、PowerPoint や動画を活用している。また、OHC (Over Head Camera) を用いて、歯科に関する模型や患者説明用の冊子等の現物を、投影して見せるといったことも行っている。さらには、模型等を教室内で「回覧」することもある。

学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、やはり学生の集中力が維持されるように工夫している。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケートの結果は、良好であったと考えている。

今後の改善としては、学生が講義を受けた後に、その分野に関して自主的に学びたいと思うような授業を行いたい。理想としては、学生には難解なものに挑戦させて、自らの力で理解して行こうと努力する時間を十分に与えたい。学生が「自ら考えることによって、理解するというところにたどり着いた。」という喜びを得られる機会を多く持てるような授業にしたいと考える。

Ⅲ 学生に期待すること

全ての学生というわけではないが、多くの学生において「丁寧な授業」言い換えれば、「痒い所に手が届く」授業を、良いと考える風潮があるのではないかと感じている。理想的には、希望としては、教員が講義の内容をまとめるのではなく、学生自身が内容をうまくまとめて、自分なりにノートすることができることを望ましいと考える。

学生が、自主的に学ぶという方向に持っていきたいと考える。将来、学生が卒業後に学び続けていく中で、自分自身で能動的にノートをとってほしいと希望する。

個人的には、学生が容易に理解できる授業を行うという方向に、教員が向かわされていることに関して、疑問を感じている。学生にとって「わかりやすい」授業は良い授業であるのかも知れない。しかしながら、学生が、「わかりにくい」ということを、教える側の教員が悪いということにしてしまい、「わからない」ということを自身で解決しようとしないうちはいけない。

全ての授業が、理解しやすい授業ばかりになってしまうことは、本当に望ましい状況と言えるのだろうか。わかりにくく表現されたものを、何とか理解しようと学生が努力することは重要な知的活動となると思う。社会人になってからは、そのような能力は無くてはならない。学生には、容易にはわからないものに対して、「面白い」、「挑戦してみたい」、と思うような気持ちを持ち続けてほしいと希望している。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：准教授 氏名：長谷由紀子
対象科目：学校歯科保健論（講義）、学校歯科保健実習（演習）、
マネジメント論（講義）

【授業の工夫】

講義と事例に基づいた個人・グループワークを中心に授業を進め、学生の活動で積極的な参加を促すように工夫して実施した。これらの授業を活用して、論理的思考力や表現力の醸成に繋がるように振り返り記録などで学生の学修状況の把握に努めた。

歯科衛生実践の根拠を念頭におき、歯科衛生士の専門性に基づく歯科衛生ケアプロセスや保健指導の立案など論理的な考え方を重視して講義・演習を行った。

【授業についての自己評価と今後の改善・工夫】

今回ご指摘いただいたことから、授業設計、授業運営といった私自身の授業を行っていく上での能力を研鑽していく必要がある。

具体的な改善方法として、基本的なことではあるが伝える能力と状況に応じた指導方法を研鑽していくべきである。また、学生の授業中の学修状況を確認するために、教室全体に目を配ることも挙げられる。

学生の表情や態度を常に観察して、授業に参加できていない学生や集中力が切れているような学生が多くいれば、質問して意見を聞く、またブレイクタイムを取るなどして、学生が飽きずに有効な学修時間となることを心掛けていきたい。また、授業計画を再度見直し、授業を組み立て直して授業内容と運営方法の改善をしていくとともに、教員が学生を理解すること、学生と関係性を確立することで、学生の学修を充実させることに尽力していきたい。

【学生に期待すること】

授業に関して率直なご意見をお願いします。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：准教授 氏名：野口有紀
対象科目：歯科衛生学総論（講義）、地域歯科保健論（講義）、
地域歯科保健実習（演習）

I 授業の工夫など

専門分野における知識・技能・態度を取得し、授業の役割の明確化する運営を目標とした。基礎と専門科目、座学と演習・実習などの多方面の授業内容の連携をはかり、実践する能力を修得する組み立てとした。

- ・ 動機付けの工夫として、現場の情報・体験情報・最新の基幹統計や一般統計など調査結果および原著論文を取り入れた理論と実際のマッチングを意識した授業運営を行った。
- ・ 概念理解の形成を助ける工夫として、図・写真・グラフなどを活用した教材を使用した。
- ・ 学習意欲を高める工夫として、理解度・反応がわかるよう講義終了ごとにマークシート形式の小テストを行った。小テストは国家試験に準じた形式で行った。答えあわせおよび解説を小テスト実施直後に行い、理解の確認と定着を図った。
- ・ 授業参加を促す工夫として、授業中の理解度を成績評価に反映させた。
- ・ 情報技術活用の理解と工夫として、視覚教材を用い、書き込みをかねた資料として配布した。
- ・ 問題発見・解決能力を高める工夫として、ケース・メソッド、社会と連携した最新の情報・調査結果を取り入れた授業の実施に努めた。
- ・ 理解度に合わせた指導の工夫として、オフィスアワーを設定したり、質問事項を用紙に記載し提出し、丁寧な対応を心掛けた。
- ・ 成績評価の工夫として、筆記試験に偏向しない多元的成績評価をした。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各科目の授業アンケート集計結果の「I 授業のあり方」「II 教え方」「III 総合評価」「IV あなたの取り組み方」のすべての項目において、平均点が概ね4.70以上で良好であった。

学生主体授業の取り組みなどにより、興味・関心を持ち、理解が深まったと思われる。特に、「II 教え方」では概ね4.80以上であり、今後も同様の手法を用い授業展開を図っていく。

さらに、学習意欲を高め、理解力が深まるよう下記について改善・工夫に努めたい。

今後の改善点として、事前学習や事後学習への能動的な取り組みができるようアクティブラーニングなど取り入れ実施をしていく予定である。

地域歯科保健実習の科目の「教員から与えられた課題は、質・量ともに適切であった」の項目の平均点が、他の項目に比較し低い傾向であった。

課題の質・量について、学生の理解度に合わせスリム化をするなど対応していく必要がある。

今後も、学習意欲を刺激し、理解しやすい授業運営が出来るよう努めたい。

Ⅲ 学生に期待すること・学生への要望等

事前学習・事後学習などの課題設定を含め、授業内容をよりよく理解し実践に役立てるよう、能動的な学習ができるようにして欲しい。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：講師 氏名：寺田泉
対象科目：高齢者歯科学（講義）、障害者歯科学（講義）、障害者歯科保健介
護論（講義）、障害者歯科保健介護実習（実習）、口腔介護予防・
リハビリテーション法（実習）

教員として初年度であり、手探りの状態でしたが、前職の経験を活かし、学生が理解しやすく、興味が持てる授業内容となるよう意識しました。授業評価アンケートの結果に関して、「科目属性による学科・選考平均点との比較」で平均もしくは若干高い評価をいただいた項目は良いのですが、それ以外の項目について、今後検討および改善が必要であると考えます。

特に障害者歯科学の「総合評価」および「あなたの取り組み方」の評価が低い点については、学生が障害者や障害者の口腔に関して具体的なイメージを持ちにくかったことが影響しているのではないかと推察しました。そのため、今後はより学生がイメージしやすいような工夫をしていくことが必要であると感じました。

講義科目では、「動画や写真がわかりやすかった、私の体験を踏まえた症例の提示や経験談、実践的な内容が良かった、質問に対して次の授業で丁寧に答えてくれた、多職種連携の現状がよく分かった、国家試験に出るところを言ってもらえて良かった」といった意見をいただきました。また実習に関しては、「嚥下調整食を実際に食べてみることでできて良かった、実習内容が工夫されていた、実習が繰り返しできてとても楽しくやりがいがあった」といった嬉しいご意見をいただきました。これらの肯定的な意見をいただいた内容については今後も継続し、より興味深い内容となるよう検討を重ねて参ります。

一方、講義科目での「教科書の音読は不要だと思う、国家試験の解説をもう少しゆっくり聞きたかった」という意見もあり、それに関しては学生の理解度を把握しつつ、改善すべき点だと考えます。また「実習のデモンストレーションを1カ所で行い全員で見学するのではなく、2～3つのグループに分かれて見学したい」という意見についても直ちに改善していきたいと考えています。

学生には是非とも積極的な授業への参加を期待します。そのために、教員として自分自身のスキルアップを図るとともに、コメントシートなどを活用しながら、なるべく学生の声を聴き、学生が質問しやすい雰囲気づくりや信頼関係の構築に努めて参ります。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：講師 氏名：森野智子
対象科目：歯科保健教育法（講義）、歯科衛生倫理（講義）、コミュニケーション演習（演習）、歯科診療補助・支援実習Ⅱ（実習）

I 授業の工夫

例年通り、「根拠ある知識を身につけ、論理的な思考力を育み、それを行動に繋げる」学生教育を目指し、多くの内容を盛り込んだ授業を組み立てています。

具体的には、1年次の概論科目において、新入生でもわかり易い到達目標を示した教育をしています。2年次の授業においては、旧知の事実から最先端事例に至るまでの数多くの情報を紹介しています。

思考の機会を設け、考えながら手法や技術が定着する学習を目指して、後期学内実習で総まとめするようデザインしています。常に、根拠を明確にした説明を最優先にしつつ、身体や心を動かす機会を持つような授業提供に努めています。また、学生の参加評価が低い傾向がある、「自分（学生）は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」については、授業の終わりに質問時間をとったり、レポートに質問記入欄を設けたりするようにして質問の機会を増やす努力をしています。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「歯科保健教育法」「歯科衛生倫理」「コミュニケーション演習」「歯科診療補助・支援実習Ⅱ」の授業評価アンケート結果は「I 授業のあり方」の平均点はそれぞれ 4.76、4.89、4.95、4.87、「II 教え方」の平均点は 4.85、4.95、4.94、4.92、「III 総合評価」の平均点は 4.77、4.89、4.93、4.92 で例年通り概ね良好でした。今回は、前期と比較して後期の評価が低い傾向はみられなかったもので、引き続き、後期になっても学習意欲を高めるよう工夫した授業展開をしたいと考えています。

一方、「IV あなたの取り組み方」の平均点は 4.48、4.67、4.81、4.82 で、なかでも、「歯科保健教育法」は学科平均点 4.52 より 0.04 低く、特に「自分（学生）は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」が大変低い (3.77) 結果になりました。

毎年、授業の終わりに必ず質問機会を設けたり、毎回提出してもらったレポートに質問記入欄を設けて、必要に応じ、全体や個人向けの回答をしているにもかかわらず、今回も本評価が低く、改善方法がわからず困惑しています。

今後は他の教員の授業を参考にさせて頂き、この評価を高める努力をしていきます。

歯科衛生学科の学生は、歯科保健指導に対する興味を持っているものの実際に指導を受けた経験が少ないことから、大学教育においても早期に歯科保健指導の機会を与える必要性を感じました。今後も、学生の日常や背景を理解することで、ニーズにしっかり応えるような教育を行いたいです。

Ⅲ 学生に期待すること・学生への要望

学生が出席するのが楽しみだと思えるような授業を提供するように努めています。社会人になる前に、大学で学ぶ意味を考えて、能動的に授業に参加してくださることを願います。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：講師 氏名：山本智美
対象科目：歯科予防処置論（講義）、感染予防法（演習）、
齲蝕予防処置実習（実習）

I 授業の目標、工夫、自己評価

「歯科予防処置論」では歯や口腔の健康の保持増進の考え方、予防方法等について理解することを目標とした。歯科疾患実態調査の結果の推移や関連する最新のデータを提示し、わが国における口腔保健の現状について考え発表する機会をもった。

う蝕、歯周疾患の原因とその予防を中心とした口腔保健管理について理解を深めるために、口腔内におけるプラークコントロールの演習を実施し、自身の口腔内を観察する機会を得たことにより口腔衛生について関心が高まったと思われる。

ライフステージにおける口腔保健管理については妊産婦期、乳幼児期から老年期まで具体的な事例から問題点の抽出、対応策を検討することにより人々の生活、環境等と歯・口腔の関わりについて関心が深まったと思われる。

「感染予防法」では感染予防対策の原則、滅菌・消毒等に関する基本的な知識を習得し、歯科医療現場における感染予防対策、医療安全について理解することを目標とした。今年度は感染症や予防対策について考える機会として、B型、C型肝炎の感染経路等について文献を指定し事前学習レポートを課した。講義後の感想から事前学習が効果的であったことがわかった。また日常生活でのヒヤリ・ハット体験を収集し、リスクマネジメントへの導入をはかり、その後、歯科医療現場におけるヒヤリ・ハット事例検討を行うことで歯科臨床現場での事故防止への意識向上をはかった。

手指消毒の演習、滅菌・消毒・洗浄の実際について実習室の器材等を目で見て体験することにより、歯科医療における感染予防対策を身近で知ることができたと思われる。

「齲蝕予防処置実習」では、う蝕予防に関する知識と技術を習得することを目標とした。講義で目的、術式、注意事項等を説明、翌週実習を行うことで理解しやすい状況を整えた。また相互実習の前に模型実習を行うことによりスムーズに移行できたと思われる。

相互実習では患者は小児であることを想定し実習はもちろん声かけ、対応、説明を相互に体験した。相手の立場になって患者、術者、補助者の役割を体験することにより理解が深まったと思われる。

実習中はモニターに手順等を写し、確認しながら実習が進められるよう工夫した。アンケート集計結果ではいずれの科目も学科平均点と同等または上回っていた。

感想・質問や提出レポートに対してはコメントを記入し一人ひとりに丁寧な対応を心がけた。この点については高評価により継続して今後も実施していきたい。

Ⅱ 今後の改善・工夫、学生に期待すること

疑問点を質問する点について他の項目より点数が低い傾向がみられたため、事前学習の効果があつたことから予習や復習に積極的に取り組むことで改善がみられるのではないかと思われる。また教員は余裕をもって授業を終えられるよう努める一方で、学生も次の行動に移せるよう段取り良く準備をしていただけたらと思う。

また教員は日々新しい情報、根拠のある情報収集に努めるとともに、学生にはニュース、新聞等を毎日見る（読む）習慣を身につけ、同世代だけでなく様々な世代の人々の特徴や行動などに興味をもち、それを授業参加やレポート課題に生かしてもらいたいと考える。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：助教 氏名：鈴木桂子
対象科目：歯科診療補助論（講義）、歯科受療支援論（講義）、
歯科衛生士業務記録法（講義）、歯科診療補・支援実習Ⅰ（実習）

1 授業の工夫

医療従事者としての基本である身だしなみ、行いや立ち振る舞いについての話を始め、患者やスタッフとの信頼関係構築のための必要とされるコミュニケーション能力向上を目指して、授業時間内に可能な限り自分で考えて発言する機会を設けています。

自身が歯科衛生士として培った経験をふんだんに織り交ぜながら、1年次には歯科衛生士という将来像を描くことができるよう心掛け、2年次の実習においては、歯科診療補助の手技・実技のなかでのちょっとしたコツなどもアドバイスに取り入れ、失敗したときのリカバリーについても忘れずに話すようにしています。

歯科衛生士になりたいという夢をさらに育むことのできるよう様々な情報提供を心掛けています。

Ⅱ 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「歯科診療補助論」「歯科受療支援論」「歯科衛生士業務記録法」「歯科診療補助・支援実習Ⅰ」の授業アンケート結果は「Ⅰ授業のあり方」の平均点は、それぞれ4.95、4.92、4.93、4.97、「Ⅱ教え方」の平均点は、4.95、4.95、4.94、4.95、「Ⅲ総合評価」の平均点は、4.90、4.92、4.85、4.95、で概ね良好だったと考えます。

一方で「Ⅳあなたの取り組み方」については、4.68、4.83、4.74、4.92という結果でⅠ、Ⅱ、Ⅲに比べると低い結果となりました。歯科診療補助・支援実習Ⅰだけが4.92であったことは、学生相互で術者・補助者・患者となつての学内実習であり、将来に向けて積極的にとりくんだという結果であろうと思います。次点の4.83の歯科受療支援論は、アクティブラーニングを採用しています。

テーマをあらかじめ学生個人個人に与えて、それについて調べ、発表するというものです。設定した発表の時間測定、発表者の誘導も学生同士で交代しながら行ってもらいます。

発表後は毎回その内容に沿った小テストを実施し評価に加えています。アンケートには発表が嫌だったという意見が1件ありましたが、他はパワーポイント作成が大変だったがためになった。人の前で話すのは初めてだったので良かった。自分が発表するテーマについて詳しく知ることができたといった意見が大半を占めていました。

今後は、取り組み方の向上のために質問時間などをさらに多く設ける、質問しやすい環境づくりなどに取り組みたいと考えています。

歯科衛生学科の学生は、歯科治療にはもちろん興味を持っているものの、実

際の口腔内の治療というのはとても繊細で細かく理解しにくいところがあります。

令和2年のコロナウイルスの影響で、遠隔授業を実施することになり、手元の作業をクローズアップした動画の作成に取り組みました。次年度からは、この動画を今回だけのことに限らず、授業の予習としても活用できるよう整えていきたいと考えています。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：助教 氏名：藤田美枝子
対象科目：歯周疾患予防処置論（講義）、歯周疾患予防処置実習Ⅰ（実習）、
歯周疾患予防処置実習Ⅱ（実習）

1. 授業の工夫

対象科目となる3科目は、歯科衛生士の主要業務である歯科予防処置のうち、歯周疾患予防に関する科目である。

講義では歯周疾患予防に関する理論とその方法について理解すること、実習科目では手技・技能を修得することを目的としている。

- ・授業開始時に前回の授業内容に関する小テストの実施及び解説を行い、事後学習の促しと、知識の定着を図った。
- ・講義科目では授業終了時にコメントシートを記載してもらい、授業内容に関する疑問点等を把握し、疑問点が残らないように工夫した。
- ・実習科目では、振り返りシートを活用し、実習に臨む前に自ら目標を立て、終了後に振り返りを行うことで、能動的な授業参加を促した。
- ・成績評価の工夫として、筆記試験だけでなく、実技試験を実施し、技能の定着についても評価を行った。
- ・実技試験では、ループリックを作成・活用し、評価の客観性、公平性に配慮した評価、学生へのフィードバックを心掛けた。
- ・動画教材や、実習では術者の視点にカメラを取り付け、学生の理解が深まるよう、工夫した。

2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各科目の授業評価アンケート集計結果より、Ⅰ授業のあり方、Ⅱ教え方、Ⅲ総合評価は、全科目4.8以上で概ね良好であった。アンケートの自由記述には、スライド、動画、術者の視点のカメラ、配布資料が分かりやすかったといった記載が多かった。

上記の授業の工夫により、理解が深まったと思われる。

今後も、令和元年度の授業展開をベースに授業を展開していきたい。

今後の改善点として、3科目とも「Ⅳあなたの取り組み方 16 自分は疑問点を必要に応じ教員に質問した」の項目が、他の項目と比較して評価が低かった。特に、歯周疾患予防処置論が3科目で最も低かった。

学生が質問しやすいよう、授業終了時にコメントシートを配布・回収しているが、授業が長引き、記載する時間が十分に確保できなかったことが要因の一つではないかと思われる。今後は、コメントシートを記載する時間を確保し、改善に努めたい。

また、事前学習に関する取り組みとして、授業資料やテキストの該当箇所を事前に提示し、学生が予習して授業に臨むよう、工夫していきたい。

3. 学生に期待すること・学生への要望等

実習は1回しか行うチャンスがない項目もあるため、体調管理に努め、なるべく欠席等のないように授業に出席してもらいたい。また、小テストや授業配布資料等を活用し、予習復習に役立ててほしい。

教員によるコメント
・専任教員 社会福祉学科 社会福祉専攻

学科：社会福祉学科 職名：教授 氏名：佐々木 隆志

対象科目：社会福祉論（歯 2・講義）・高齢者の生活の理解 I（介 1・講義）
高齢者の生活の理解 II（介 1・講義）・児童福祉論（介 2・講義）・保育実践
演習・卒業研究（社 2・演習）・社会福祉演習（社 1・演習）・ソーシャルワ
ーク実習指導（社 2・実習指導）・ソーシャルワーク実習（社 2・実習）

令和元年度授業評価アンケート結果では、①社会福祉論（歯 2・講義）、当該科目平均点 4.86、学科・専攻平均点 4.69、②高齢者の生活の理解 I（介 1・講義）、当該科目平均点 4.65、学科・専攻平均点 4.72、③高齢者の生活の理解 II（介 1・講義）、当該科目平均点 4.36、学科・専攻平均点 4.71、④児童福祉論（介 2・講義）、当該科目平均点 4.86、学科・専攻平均点 4.69 となっている。

歯科、社会福祉論及び介護 2 年児童福祉論では、学科・専攻平均点を上まわっている。しかし、介護福祉専攻、高齢者の生活の理解 I 及び II では、平均を下回っておりその反省が講義担当者に求められる。

昨年度、講義のなかで全科目を通じて意識し教授した点は、国が 2017(平成 29)年に示した、「地域共生社会の実現に向けた取り組みの推進等」である。この内容は、2017 年介護保険法改正の大きなポイントになっている。

国がこの内容を示した背景には、「神奈川県津久井やまゆり園、障害者殺傷事件」によるところ大きい、障害の有無にかかわらず、地域の中で共に暮らす社会の実現に向けた内容である。筆者らは、講義の中で共生社会の実現に向けた具体的内容を講義してきた。講義評価が一部低い科目は、その内容が伝授されていない点が考えられ、今後の反省と受け止めている。

講義の中で、自由記述の一部には「授業が面白い」「授業がわかりやすい」などの評価があった。また、改善して欲しい内容では、「板書が読みにくい」「早口な時が多い」などの意見があった。

児童福祉論の総合評価では、「この授業は新たに学んだりすることが多い」4.89 となっている。この評価は、児童福祉の最新の課題とその要因、対策を具体的に示した現れといえる。

令和 2 年度に向けた授業課題として、PDCA サイクルを機能させた、講義を展開したいと考えている。具体的には、講義を構成する要素として 3 つの柱を考えている。

- ①常に分かりやすい講義に心がける。
- ②明るい、ユーモアのある講義をつくる。
- ③年度途中で学生の講義に対するニーズ把握を行い、そのニーズに応じた講義を心掛ける。

また、最新の状況を常に学生に講義し、質の向上に心がけたい。その為には、学生のニーズに応えることが大切である。

また、介護福祉専攻 2 年で開設されている「高齢者生活の理解 I」及び「高齢者の生

活の理解Ⅱ」でそれぞれ国試対策の指定科目であるため、過去問題を解説し 100%合格を目指した講義を展開したい。

令和元年度は、介護福祉士国家試験合格 100%を達成した。この数値を次年度に向け繋いでいきたいと考えている。その為には、教員同士の情報共有も講義の質を高めるために必要である。

今後も対象学生が毎年異なる点(受講態度・成績など)を意識しながら、常に学生目線に立ち、学生の学ぶ視点を大切に、大学で高等教育を保障し、質の高い講義・演習を進めていきたい。

学生のコメント・評価に深謝します。ありがとうございました。

学科：社会福祉学科 職名：教授 氏名：三田英二

対象科目：子どもの理解と援助（演習）、心のしくみ（講義、分担担当）

I 授業の目標・工夫など

昨年度同様、「臨床心理学」（講義）は、受講生が少数であったため、評価対象から除外されている。社会福祉専攻、こども学科で開講される「子どもの理解と援助」は、当該年度から「保育の心理学Ⅱ」が、科目名が変更された科目である。

「保育の心理学Ⅱ」同様、演習科目である。前科目同様、基本的な知識が少ない中での演習は、受講生に、演習の方向性に戸惑いを感じさせると考えており、従来通り、授業スケジュールの前半は、改訂された保育士養成カリキュラムで指定されている内容にそった演習になるような内容を取り上げた講義を行った。

介護福祉専攻で開講される「心のしくみ」でも、例年と同様の記載になってしまうが、相談援助に活用できるような内容も含めるように講義を行った。これは、介護福祉士に期待される職務内容が、介護技術だけではなく、相談援助も期待されているためと考えているからである。これはもちろん、以前から記載しているように、カリキュラム改訂により、2年次開講の「相談援助の理論と方法」が、廃止されてしまったためである。

社会福祉専攻とこども学科では、保育士資格取得のための選択科目として、「臨床心理学」が設定されているが、前述のように、受講生が少数であったため、評価対象とはならなかった。講義内容としては、相談援助を多角的に考えられるような授業展開をしていることは紹介しておきたい。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

これも毎年のことなので、例年通りの記述となってしまうが、アンケートの評価点は、標準偏差を加味して考えれば、概ね、平均的な評価であったと考えている。

例年記載していることであるが、科目の特性上、座学となってしまう「心のしくみ」においては（評価対象外となった「臨床心理学」も含め）、たとえ話（先行オーガナイザー）を多用し、出来る限り、多くの学生の興味・関心を引けるように心がけている。今後も更に興味・関心を持たれるような先行オーガナイザーに心がけたい。

「子どもの理解と援助」も、座学となる部分がある。同様の対応をしていきたいと考えている。

評価が例年同様の結果のため、例年通りの記載となってしまうが、「子どもの理解と援助」は、前年度記載したように、科目名が変わったことを反映させた内容になるよう心掛けた。講義期間後半でグループ発表を行い、発表内容に関してのコメントをするかたちで、重要なポイントや関連事項など説明を行った。

受講生の発表内容、プレゼンテーションの仕方など高く評価できるものであった。年々、学生のプレゼンテーションの質が高まっている印象がある。

学科：社会福祉学科 職名：准教授 氏名：江原勝幸
対象科目：社会福祉原論 II（講義）

I 授業の目標・工夫など

授業の目的は「社会福祉 I」で学んだ社会福祉の基礎的理解を発展させ、内発的福祉文化やインクルーシブな福祉コミュニティの創造の視点で現代の社会問題を取り上げ、社会福祉の理想と現実について理解することに定め授業の到達目標を以下に設定した。

- 1) 自分自身の生活から社会福祉について考え、自分の言葉で「社会福祉とは何か」を述べることができる。
- 2) 新聞記事・報道番組などを活用し、狭義の福祉に限らず、広義の福祉の視点から現代社会問題の光と陰について考察することができる

これまでの授業評価において、ビデオ映像を用いた教材の活用は学生に高い評価を得ており、その時々で話題・問題となっていることを取り入れるように工夫した（令和元年度は、台風 19 号避難、非行児、ネット・ゲーム依存、ながらスマホ、発達障害、新出生前診断、国家財政、自殺、過労死、死生学など）。

また、SW 後期実習の報告会において報告者が使用した福祉専門用語について 28 語を取りあげ、各自 1 語を調べその対象・内容・根拠法・実施機関等を A4 1 枚にまとめる取り組みを初めて実施した（福祉事務所、社会福祉協議会、地域包括支援センターについては担当教員が授業で説明）。学生がまとめたものを学生数分印刷し、学習の参考用に配布した。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

令和元年度は、これまでは社会福祉専攻 1 年及びこども学科 1 年の必修通年科目「社会福祉原論」で実施してきたが、I 及び II と半期科目となり、II においては対象学生も社会福祉専攻のみと大きく変更したが、社会福祉専攻の学生にとっては、科目名が変わっただけで、前期（I）で社会福祉理解の基盤となる福祉原理・原則を中心に押さえ、後期（II）で学生に身近で社会問題になっている話題から福祉理解を深める段階的・発展的な内容・方法を用いている。

授業のあり方や教え方などは基本的に変更せず、教本を使用しない授業の 6 年目である。

授業はレジュメと関連資料（主に新聞記事）を毎回配布し、ポイントを押さえた授業展開を進めた。視覚に訴える授業は学生が興味を持ち、理解度も高まるため、ほぼ毎回授業に関連するビデオ映像を用いた。

単純なビデオ視聴では授業との関連性が低くなるため、その感想・意見等を書き込んで提出するワークシートを作成し、配布・記入後の回収をした。

対象学生が社会福祉専攻に絞られたこともあり（26 名）、大項目の「I 授業のあり方」

「II 教え方」「III 総合評価」は学科・専攻平均点を上回り、各項目も例年より平均点は上がった。

評価項目で最も低いのが #16「教員への質問」3.75 であるが、2 番目に低いのが #2「計画的授業展開」4.67 と #16 を除き 4.5 を上回っている(平均点 4.8 以上が 6 項目)。ワークシートには授業・ビデオの感想・意見・質問を書き込む欄を設けているが、今年度は講義最後に授業の質問する時間(質問以外の感想なども共有)を設け、疑問点をそのままにさせない取り組みを導入する。

学科・専攻：社会福祉学科・社会福祉専攻 職名：准教授 氏名：中澤秀一
対象科目：社会保障論（講義）、社会保障論（講義）、公的扶助論（講義）、
公的扶助（講義）、ソーシャルワーク実習指導（演習）

I 授業の目標・工夫など

まったりとした平板な展開にならないように、復習テストを実施する、発言の機会を設ける等により、できるだけ学生と授業時間内でコミュニケーションを図った。

パワーポイントを利用した授業では、ノートテキングの時間を確保できるように配慮した。授業アンケートの自由記述欄には「みんなの様子をみてスライドを流していた」とのコメントがみられた（社会福祉専攻2年「公的扶助論」自由記述欄より）。ビデオ教材は、出来るだけアップデートな内容のものを採り入れるようにして、学生がいま社会で問題になっていることに触れられるようにした。同じく自由記述欄には「ビデオを使うことでより詳しく分かった」とのコメントをみられた。このような工夫は今後も続けていきたいと考えている。

演習科目については、担当教員で連携して個別に学生の実習指導にあたり、実習報告会や実習報告集で実習の成果を公表することができた。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業評価アンケートの結果では、「授業はシラバスどおり、計画的に展開されていた」については、社会保障論（社会福祉専攻1年）で**4.95**（4.85）と上回った科目もあるいっぽうで、公的扶助論（同2年）は**4.86**（5.00）で昨年よりも平均点が落ちた科目もあった（括弧内は2018年度同科目における自身の平均点）。とはいえ、総合すれば一定の水準は保てたのではないかと考える。

教え方については、「学生の理解が深まるように授業を工夫していた（説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など）」については、社会保障論（社会福祉専攻1年）で**4.86**（4.56）、社会保障論（介護福祉専攻2年）で**4.85**（4.71）、公的扶助論で**4.91**（4.62）、公的扶助で**4.81**（4.70）等であった（括弧内の数字は学科・専攻の「II 教え方」の平均点）。いずれも学生から評価されたと考える。

総合評価では、「この授業の内容は良く理解できた」=4.48、「この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」=4.86、「自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した」=4.70であった（社会保障論、社会福祉専攻1年）。学生の理解度を高めることに関しては、まだまだ工夫を模索していく必要があると感じる。

学生の授業に対するモチベーションを向上させるには、受け身の姿勢ではなく能動的に授業に臨むように意識を変革させていかなければならない。今後もそのことを念頭に置いて、学生のニーズを把握することに努めたい。

学科名：社会福祉学科 職名：准教授 氏名：松平千佳

対象科目 ソーシャルワーク論Ⅱ ソーシャルワーク演習Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ

ソーシャルワーク実習指導 ソーシャルワーク実習

学科共通科目「ホスピタル・プレイⅠ(入門編)」「ホスピタル・プレイⅡ
(障害児編) ホスピタル・プレイ・スペシャリスト養成講座

I. 授業の目標・工夫など

今年度は、松平が会頭を務めた第8回日本小児診療多職種研究会に社会福祉専攻の1年生、2年生とも参加させることにより、ソーシャルワークに必要な多職種の連携と複合的な生活問題解決への取り組みを学ぶ機会を設けた。

学生から返ってきた感想を読むと、それぞれが自分の関心のある領域における学びを深めるだけではなく、専門職として仕事をする意識づけをすることができたと考える。例えば、自ら吃音障害を持つ学生が、吃音障害を持つドクターの教育講演を聞くことにより、吃音障害は不登校など二次的な障害に発展する可能性があるため、発達期を通した包括的な支援が必要であることを学んだ。ソーシャルワーク論、およびソーシャルワーク演習で学んだ内容を、具体的な事例を用いて考察する力がついたと考える。

学科共通科目「ホスピタル・プレイⅠ・Ⅱ」では、変わらず学生評価が高い。これは、現場で働くHPSが実際に自分が勤める病院や施設で用いるホスピタル・プレイをふんだんに紹介する内容で授業が構成されているためだと思われる。

講師は動画なども多く使い、視覚的、実践的な学びを行うよう工夫している。また、障害児とかかわる際に役立つツールなどを作り、体験的に医療と遊びを融合させる方法と効果を学習する工夫を行っている。

実習指導については、複数担当制であるためスタンダードを設定することが難しいが、少人数で学べるメリットがある。実習という緊張感を要する学びが効果的に有意義に遂行されるように、各教員が強みを生かし工夫しているところが良い点である。

II. 授業の自己点検・自己評価

上記したすべての科目及び評価項目において、4.5以上の結果が出ており、満足している。

自由記述においても、「深く考える授業だった」「しんどかったけど楽しかった」「自分について多くのことを考えて元気になった」など、ソーシャルワーカーになるための思考が進んだことが分かる記述があり大変うれしかったと感じた。何かを記憶する学びではなく、人が人を援助する意味や価値を考えていくことに意義を見出していることが、学生の感想からもうかがえる。

かなり大きなつまづきや、家庭の問題など複雑な社会的な問題を抱えている本学の学生にとって、社会福祉の学びは自分に引き付けて考える内容が多い。

福祉の課題を自ら体験している学生には自己覚知が重要であり、その過程をコーチングしていく教員の立ち位置を意識し、学生の成長を促していきたい。

Ⅲ. 授業改善の展望

授業で扱うテーマはかなり生活に密接した生々しいテーマであるため、引き続き導入には細心の注意を払っていきたい。虐待はDVなどを客観的に分析評価できる力をつけられるよう、工夫していきたい。

学科・専攻：社会福祉学科社会福祉専攻 職名：講師 氏名：佐々木将芳
対象科目：子ども家庭福祉（講義）、ソーシャルワーク論Ⅰ（講義）、
ソーシャルワーク論Ⅳ（講義）

講義におけるねらいと工夫

子ども家庭福祉（通年）およびソーシャルワーク論Ⅰ（前期）は1年次配当科目であり、学生に対して社会福祉に関連する基本的理解を促す意味も持っている。そこでは、現代社会における子ども家庭福祉の重要性を理解することや、ソーシャルワークについての基礎的な理解と基盤となる理論を学ぶことを目的としている。また、ソーシャルワーク論Ⅳは2年次（後期）配当のため、ソーシャルワーク実習を終えた学生に対して発展的理解とソーシャルワークにおける価値・技術の再確認、そして実践者とし現場に向かうための心構えを持つという位置づけで講義を行った。

講義についての自己評価と今後の改善・工夫

それぞれの講義ではできる限り具体的な事例や社会問題を提示し、学生にとって各回の内容をイメージできるよう心がけた。特に1年次科目は社会福祉やソーシャルワークという言葉、内容に初めて触れるケースも考えられるため、より丁寧に語句の説明なども行った。

2年次科目では、学生のそれまでに行ってきた各実習での経験も可能な限り振り返られるよう心がけ、学生自身の経験、体験と理論が結びつけられるように講義を進行した。児童家庭福祉は、その意図を理解されたように感じる。

学生にとって、「新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」や「この分野に対する興味・関心増した」、「授業に意欲を持って受講した」などの項目が、概ね「そう思う」との回答であった。しかし、ソーシャルワーク論ⅠおよびⅣについては専攻平均から低い項目や標準偏差の値が大きい項目が見られたため、ねらい通りの講義を展開できたとは言い切れない面がある。理論や技術については、学生にとって決して身近なものではないので、より一層具体性をもたせ、学生自身の体験や興味に引き寄せられるような指導方法を考えていきたい

学生に期待すること

専攻平均でも同様の傾向が見られることだが、疑問点などについて質問する学生の少なさは課題として感じられる。講義の中で必ずしも受講者全員の理解度に合わせた進行ができないケースもある中で、学生自身が主体的に自らの進行业況を理解しそれを補うような姿勢を期待したい。

本学、専攻の特色として少人数教育を実施しているからこそ、受け身ではなく積極的な姿勢をもつきっかけにしてもらいたい。

そして、教員としても、学生の知りたい意欲や学びたい要求に十分応えられるよう、質問・疑問を問いかけて促すような工夫を行っていきたい。

学科・専攻：社会福祉学科・社会福祉専攻 職名：助教 氏名：加藤恵美
対象科目：保育者論（講義）

I. 授業の工夫

保育者論では、保育者の役割、倫理、専門性、協働、キャリア形成に関する学びにおいて、それらが求められる理由と意味を履修生自身が考察すること、また、自分自身の価値観や考えと照らし合わせ自己覚知することにも重きを置いた。

具体的には、小課題について履修者自身で考え、意見をまとめる時間を設定した後、グループワークで意見の交換・共有を行った。さらに、グループディスカッションの結果を発表し合うことを通して、多様な意見を知り、課題の理解と自分の考えを深める機会を持てるようにした。

保育士は子どもの直接的援助とともに、子どもを取り巻く社会環境を理解し、必要な改善に努めることも役割のひとつであるため、保育所、幼稚園、学校、家庭や地域で多様な環境に生きる子どもの理解も重視した。そのため、保育実践が記録されたナラティブ教材を使用した。

視聴の際は、①着目点を提示した上で、個人としての感想と、保育士の観点からの感想と考察を記述する課題、②保育内容を体験的に理解できるよう、優れた保育実践のドキュメンタリー番組を視聴し観察記録をとった上、保育指針に照らし合わせて分析する課題などを設定した。さらに子どもをめぐる様々な社会問題の理解を目的として、事例を用いて、子どもと保護者の置かれた環境や問題を身近に感じながら、そのニーズを探求し支援方策を考える演習なども行った。

保育士のキャリア形成の基盤として雇用労働者としての権利と、労働環境・条件の改善の方法に関する授業も行った。また、保育士の専門性に関する最新の研究知見を活用し、保育分野の動向なども紹介した。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

グループワークの発表内容や課題、リアクションペーパーにおいては保育士に求められる専門性の意味と必要性、自分自身の価値観の振り返りなどの記述がなされており、これらの結果と期末試験の結果と合わせて、授業目標は概ね達成できたと考える。

社会福祉の専門職として幅広い分野で実践することを想定し、優れた実践を行う児童福祉施設や学校の実践を紹介し、それらを通して、支援のあり方について考察する課題を課した。

今後も視野を広げられるような教材を用いかつ体験的に学べる授業を行っていきたい。そして、授業構成と内容を精選し、効率的かつ効果的な進行に努めたい。

社会福祉学科介護福祉専攻 教授 高木剛

対象科目：介護過程A（講義）、認知症の理解Ⅱ（講義）、介護福祉論Ⅱ（講義）、
発展介護過程（講義）、発展介護技術（演習）

I. 授業の目標・工夫など

1) 介護過程A

本授業の目標は、介護過程の目的・意義、展開プロセス、チームアプローチ等について理解するとともに、これらを他者に説明できることである。

学生の理解を高めるために、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、身の回りの出来事を題材とした事例問題の作成、練習問題の作成等の工夫をした。

2) 認知症の理解Ⅱ

本授業の目標は、認知症の種類やその代表的な症状、中核症状と行動・心理症状（BPSD）、認知症の人のケアの基本的原則等について理解するとともに、これらを他者に説明できることである。

学生の理解を高めるために、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材（DVD等）の活用、最近の新聞記事の紹介等の工夫をした。

3) 介護福祉論Ⅱ

本授業の目標は、社会福祉士及び介護福祉士法の概要、職業倫理、リスクマネジメントなどについて理解するとともに、これらを他者に説明できることである。

授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、関連資料の配布のほか、視聴覚教材（DVD等）の活用、最近の新聞記事の紹介をする等の工夫をした。

4) 発展介護過程

本授業の目標は、介護実習における介護過程の実践的展開を目指し、これまでに修得した知識・技能を活用すること、また、チームの一員として介護過程の展開に係る意見交換等を行えること等である。

学生の介護過程展開の力量を高めるために、複数の教員ごとに小グループを編成し、グループ内で発表したり意見交換等ができるよう工夫した。

5) 発展介護技術

本授業の目標は、基礎介護技術、応用介護技術、発展介護過程の学修を総括し、これらの基礎的・応用的知識をベースに技術研究をとおして発展させていくことである。

学生の技術研究能力を高めるために、授業では複数の教員ごとに小グループを編成し、グループ内で利用者の事例を検討したうえで他のグループの前で発表（実演、パワーポイント等による口頭発表など）する等の工夫をした。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

1) 介護過程A

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.78～4.88であり、全ての項目において学科・専攻の平均点を上回った（学生から高い評価を得ることができた）。今後も引き続き、学生の理解を促す工夫を考え・実行していきたい。

なお、学生からは、「必要なポイントを端的に教えて下さりわかりやすい」「わかりやすかったのでよかったです」などのコメントが記載されていた。

2) 認知症の理解II

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.66～4.78であり、全ての項目において学科の平均点を上回った（学生から高い評価を得ることができた）。

また、学生のコメントとして、「進捗がちょうど良くついていける早さでした」「進捗と内容がちょうど良く、とてもわかりやすかった」「話がおもしろい」などの記載があったことから、学生の満足感を得ることができたと考える。

今後も引き続き、学生の理解を促す工夫を考え・実施していきたい。

3) 介護福祉論II

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.58～4.62であり、全ての項目において学科の平均点をわずかに下回った。その主な原因として、質問への

対応、レポートのコメントなどが十分でなかったことが考えられる（平均点4.48）。なお、学生のコメントでは、「プリントが非常にわかりやすくまとめられていた」「レジュメが見やすくわかりやすかった」などポジティブな記載が目立った。

学生のコメント内容も参考にしながら、授業では質問の時間を十分に確保するなどの工夫により学生の満足感を得られるように努めたい。

4) 発展介護過程

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.64～4.67であり、全ての項目に置いて学科の平均点をわずかに下回った。その主な原因として、「教員から

与えられた課題は質・量ともに適切」と回答した値が最も低い（平均点4.52）ため、課題に対する学生の負担感が少なくないと考えられる。また、学生のコメントとして、「きちんと時間を作ってカンファレンスをしたかったです」との記載があった。

授業時間が限られているため、十分にケアカンファレンスができなかったことは否めない。本授業は複数教員によるため、個々の教員の評価を分析するのは困難であるが、少しくして学生の満足感を得られるように、授業のあり方、教え方などの改善を図りたい。

5) 発展介護技術

「授業のあり方」「教え方」「総合評価」の評価項目の平均点は、4.54～4.67であり、全ての項目に置いて学科の平均点をわずかに下回った。その主な原因として、「授業の量や進度」「学生の理解度に配慮した授業展開」「学生の理解を深めるための工夫」が十分でなかったことが影響したと考えられる（平均点 4.48）。

なお、例年、学生のコメントが記載されているが、今回は何も記載されていなかった。

本授業は、複数教員によるため個々の教員の評価を分析するのは困難であるが、評価内容を踏まえて授業のあり方、教え方などの改善を図りたい。

学科・専攻：社会福祉学科・介護福祉専攻 職名：教授 氏名：立花明彦
対象科目：障害者福祉論（講義）、障害者の生活の理解Ⅰ（講義）、
障害者の生活の理解Ⅱ（講義）、障害とコミュニケーション技法（演習）
リハビリテーション（講義）

担当する「障害者の生活の理解」と「障害者福祉論」は、資格取得のために必修であり、授業で含むべき事項が示されている。それらを教授しながらも、筆者であるからこそその授業を展開できればと思い教壇に立っている。

このうち、「障害者福祉論」は選択科目に当たる学生も5名が履修してくれた。とはいえ、授業をしていて今年度の学生には筆者の話すことがどこまで伝わっているか、あるいは理解しているか不安に駆られることが少なくなかった。すなわち、教員側から言えば反応の薄い学生であったことになる。それゆえ授業アンケートの結果が気になったが、「授業の在り方」4.79（学科平均4.59）、「教え方」4.59（同4.56）、「総合評価」4.68（同4.53）で、「あなたの取り組み方」4.49（同4.48）の数値に安堵している。さらには「教員の熱意」4.90、「授業の難易度は適切」4.81、「新たに考えたり、学んだりすることの多い内容であった」4.86となっていて、筆者が抱いた思いは杞憂に終わったようでもある。

自由記述欄には、「障害について詳しくわかった」「黒板の字が大きくてきれいで読みやすかった」「障害者への偏見が少なくなった」「当事者から話を聞くことができた」等の声が寄せられていて、いずれも肯定的な内容であり、上記の数値を裏付けているとも言える。なお、「黒板の字が大きくてきれいで読みやすかった」は、筆者の指示に基づいて板書するワークアシスタントの功績であり、彼女に感謝する次第である。

授業では障害者の実像を理解する一助として、時折テレビ番組から関連する内容があればこれを録画し、用いた。また、新聞には障害者に関わる記事が毎日のように掲載されるので、必要に応じて取り上げ、問題点を指摘したり、解説したりした。そのうえで、学生から意見や感想、質問などを書いてもらい、それを翌週の授業で紹介し、教員のコメントを加えたり、質問に答えたりした。これらは従来から筆者が行なっていることで、方法としては目新しいものではない。

しかしながら、学生の意見や感想を書いてもらうこと、それに合わせて教員が質問に答えたり、コメントする機会は前年に比べて少なかった。それは、ある程度意識して行なったのではあるが、このことが筆者と学生との間の距離、筆者にとっては学生の反応の薄さを生んだのではないかと考えている。この点は、改めて検討し、導入していきたい。

介護専攻の学生へは、1年次に必修科目である「障害者の生活の理解Ⅰ」を教授しているが、こちらの学生も反応が薄く、授業態度そのものが気になる学生が複数いて、いかにして彼らの意識を授業に持続させるか苦労した。アンケートの結果は、「授業の在り方」4.68（学科平均4.71）、「教え方」4.67（同4.70）、「総合評価」4.57（同4.71）で、いずれの項目も僅少とは言え、学科平均を下回った。

これは筆者が本学へ赴任して約20年にして2度目のことで、少しばかり気持ちが沈ん

だ。ただ自由記述欄には、「学習したい内容を深く知れてよかった」「授業のペースがちょうどよくわかりやすかった」「レジュメが見やすかった」等と記されていて救われた。一方で、授業への改善を求める声はなく、受け止め方に困惑する。教員として学生へ望みたいことはいくつかあるが、ここはまず、結果を事実として受け止め、今一度振り返りながら改善を試みつつ、学生に向き合っていきたい。

学科：社会福祉学科・介護福祉専攻 職名：准教授 氏名：奥田都子
対象科目：家族支援論（講義）、保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）（演習）、
社会福祉演習（演習）、家族福祉論（講義）、生活支援技術Ⅰ（演習）、
介護レクリエーションⅠ（演習）実習指導Ⅱ（演習）、

I 授業の目標・工夫など

「家族支援論」は、社会福祉専攻とこども学科で開講される保育士資格取得必修科目である。社会福祉専攻の受講生の大半は社会福祉士（受験基礎）資格を目指し、こども学科の受講生は保育士と幼稚園教諭資格を目指している点で、両学科の学生の児童家庭福祉関連の基礎知識は若干異なるが、既習科目内容との重複をできるだけ避け、支援対象となる家族そのものへの理解を深めることに重点をおくとともに、保育現場における具体的な家族支援の技術習得を目標とし、ディベートやロールプレイなどの演習を取り入れている。

「保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）」は、保育士資格取得選択科目であり、社会福祉専攻とこども学科の学生が受講対象である。グループワークによる壁面構成の製作を通して、こどもへのメッセージの表現方法、素材の選び方、道具や材料の使い方を実践的に学び、最終回は個人の小作品に取り組むことで、様々な技法や素材を用いた製作が可能になる環境を整えた。

介護福祉専攻の「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」については、いずれも家族の福祉ニーズに目を向け、生活の諸問題を解決していくための知識や技術、考え方を身につけ、問題解決能力を養うことをねらいとしており、自分自身の生活上の問題に目を向けることから始め、援助者として福祉サービス利用者とその家族の生活を支援するための生活支援能力を養うことを目標としている。

「介護レクリエーションⅠ」は、福祉現場におけるレクリエーション提供に向けて、生活文化を活用したレクリエーションの理論と実践について演習を通して学ぶことをねらいとしている。

II アンケート結果に対する自己評価と今後の改善・工夫

「家族支援論」は講義科目であるが、授業で学生の反応の良かったディベートを今年も1回取り入れ、後半では保育現場での具体的な家族援助場面を想定したロールプレイを行った。

そのねらいは保育士と保護者の両方の立場と思いについて考え、演じることを通して援助のありかたについて体験的に学ばせることにある。

自由記術の3分の1はロールプレイに言及しており、「ロールプレイは難しかったけど楽しかった。」「クレームや事例を使ったロールプレイは今後役に立つと思った。」「ロールプレイの発表があつて自分事として考えることができた」など概ね良好であり、この方式による授業運営は、講義を通して学び、考え、行動することに貢献していると思われるので、今後も継続・拡充していきたい。

「保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）」では、4～5人のグループで共同製作するため、グループワークにおける負の側面にも留意し、完成後のレポートでは、どんな小さなマイナス感情も遠慮なく申告してもらおう。何もないとする回答より、具体的な回答の方が多く、学生がどのような言動・行動に気を使いながら協働し、グループワークから何を感じ学んでいるのかを知る手掛かりとなる。

レポートからは、できる限り学生の希望通りの素材を準備したことや、作品へのプラスのコメントに対して学生の評価が高く、製作の楽しさを述べるものが多かったことから、今後も材料準備に手を抜くことなく、こまめにコメントしていきたい。

また、「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」では、生活上の問題に気づかせ、その解決・改善に向けての行動や社会資源の活用についての検討を通して援助のプロセスを学んでいくが、介護技術に比べると「この知識・技術を習得した」「できなかったことができるようになった」という明確な実感や達成感は生じにくい。そこで、授業では福祉サービス利用者が生活場面で問題に直面する事例を設定して、学んだ知識や技術をどの様に用いれば生活支援に役立つのかを体得することができるようにワークシートを用いたり、ロールプレイを通して実践的に考える機会を設けている。

また、生活支援技術Ⅰでは、身近な高齢者・年長者へのインタビューを課し、そのライフヒストリーを作成するという課題に取り組みさせることも例年行っている。

アンケート結果をみると、家族福祉論の平均点は4.82で非常に高い数値ではあるが、他科目の試験準備のために、潮が引くように教室を退出してしまい、誰一人自由記述を記載していない。

昨年度は、「**現実問題や事例を踏まえた授業**はとても興味が惹かれる内容で、新しい知識となる部分が多く、選択してよかった。地域福祉関係も多々あり、面白かった。」「**体験談が多く**、説明が細やかでとても分かりやすく、想像、共感がしやすかった。ロールプレイは良い体験になった。」「**ロールプレイを行うことで、利用者や家族の気持ちを考える機会**となり、介護者としてどのような支援をするか考えることができた。」などの記載があり、教科書の内容・知識として示されるよりも、学生にとっては体験談として示されるほうが定着しやすく、現実問題や事例に即して、自分ならどうするのかを考え、ロールプレイを通して演じることによって、知識や技術を修得しやすいということがうかがわれる。

また、ロールプレイについての肯定評価が多く見られることから、大多数の学生にとってはこの方法が効果的であったと判断できる。とはいえ、グループワークはメンバー構成によっては話し合いや作業が進まずに遊んでしまう危惧もあり、すべてのグループが時間内に課題を達成できるとは限らないため、グループのメンバー構成を見ながら教員が随時声をかけ、助言を与えるなどの工夫を行ないたい。

「**介護レクリエーションⅠ**」については、毎回、座学による理論編と、グループワークによる実践編を組み合わせた授業展開を工夫し、アンケート結果からも「講義だけでなく、実際に動いたりするのが楽しかった」「季節の行事の知識がついた」「グループで行うジェスチャーゲームや壁面づくり、七夕飾りづくりなどがとても楽しかった」「共

同作業が楽しかった」など、実践編への満足感が高かった。グループワークにおける実践や製作活動によってグループでのレクリエーションの楽しさを実感させるとともに、季節行事と連動させたレクリエーション提供に向けた知識・技術の向上には寄与できたと考える。

今後もグループワークの意欲を維持できるように、時間配分などに細かい配慮を加えていきたい。また、改善して欲しいこととして、時間の少なさについての指摘があった。8回という限られた時間での授業展開のため、時間をかけて良い作品を作りたいという学生の望みを十分にはかなえることは難しい。しかし、介護現場で提供するレクリエーションは、時間や経費の制約の中で企画実施しなければならない以上、経費の心配がない授業だからこそ、時間の制約をどう克服するかを学ぶ機会にしてほしいと考える。

全体の総括として、グループワークやロールプレイなど学生が自ら展開していく力を活用した授業形式は、舵取りの難しさもあるが、学生の学ぶ意欲を喚起し、授業への関心を高めることには大いに効果があったと感じる。また、自由記述から、(作品や発表への)適切なコメントや、リアクションペーパーへのコメントなど、学生が授業を通してのキャッチボールを期待していることがわかるため、1コマの授業あたりコメントに4時間を費やすが、今後も可能な限りコメントはしていきたい。

人前での質問はしたがらない学生たちであるが、リアクションペーパーによる質問は、こちらが答えるほどに活発になっていくことも実感できた。

今後も、学生とのキャッチボールを心がけ、意欲を引き出す工夫を続けていくとともに、ディスカッションのまとめ方やプレゼンテーションの方法に工夫を盛り込みながら、学生が自分から積極的に取り組めるような授業方式を探っていきたい。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻 職名：講師 氏名：天野 ゆかり
対象科目：医療的ケアⅡ（演習）、介護福祉論Ⅰ（講義）、介護過程Ⅱ（講義）、
介護過程Ⅲ（演習）

医療的ケアⅡ

本科目は、医療的ケアの中の経管栄養に関連する基礎知識の講義、演習、技術確認が中心となる。介護の学生が苦手な医療分野の科目ではあるが、終末期の医療やケアに伴う倫理的な課題のグループワークなども熱心に参加できていた。

演習では、各グループを4人の教員（非常勤2名を含む）が担当して指導にあたったが、演習の準備や片付けなどに手を抜いている学生への指導が行き届かなかった点は、一部の学生の不満につながった。演習の手順など各教員で違いがないよう事前の準備や打ち合わせを丁寧に行ったこともあり、全体的には学生の評価も非常に高かった。

介護福祉論Ⅰ

本科目は、講義が中心であるが、学生自身の介護観を育むうえで重要な科目でもある。講義だけでなく、グループワークや映像教材などによる意見交換など、自分の考えを示すこと、仲間の意見を聞くことができるよう内容に配慮した。また、ボイスセラピー、絵本専門士をゲストスピーカーに迎え、発声の仕方、声色の使い分けによるコミュニケーションなどを意識して、コミュニケーションをとることの意義など演習を通して学んだことで、学生にとって興味深い学びの場となった。このような取り組みが、高い評価につながったと考える。

介護過程Ⅱ

本科目は、疾患や障がいのある方への介護過程の理解と展開をするもので、学生にとってはやや難しい科目でもあった。そのため、映像資料や障がいの体験、演習などを活用して、頭だけでなく体感を通して学んでもらうことを心掛けた。また、現場で活躍する多彩なゲストスピーカーを招聘し、より障害、疾患別のケアの特性がイメージできるよう工夫した。

介護過程Ⅲ

本科目は、4人の教員によるオムニバスとなる。科目の内容が多彩であるため、広く学べる反面、教員の担当する各講義・演習とのつながりが分かりにくいところもあったかもしれない。それぞれの教員が、現場での経験をふまえて当該授業の具体的なイメージが理解できるような工夫をした。また、リアクションペーパーなどから理解度を確認し、疑問に対してフィードバックできるようにした。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻 職名：講師 氏名：木林 身江子
対象科目：身体のおくみⅠ（講義）、介護過程Ⅳ（講義）、医療的ケアⅠ（講義）、
医療的ケアⅡ（講義・演習）、医療的ケアⅢ（講義・演習）

「身体のおくみⅠ」は、全体的には学科・専攻平均点を上回り高評価であった。授業は、テキストに沿って進め、補足が必要な部分は別途資料の配布を行っている。学生からは、「黒板を使用しての説明が分かりやすい」との感想がある一方で、授業の量・進度に関し「スピードがはやい」との意見もあった。

国家試験を念頭におきつつ、授業の内容・量を精査したいと思う。また、課題（宿題、レポート）を出すことは少なかったが、学生の理解度に配慮して授業を進めるためにも、学生自身の意欲を喚起する意味でも、適宜ミニテストを取り入れたり、感想・質問用紙を配布して疑問に対応したりすることによって改善を図っていききたいと思う。

「介護過程Ⅳ」は、心臓、呼吸器、腎臓、膀胱・直腸、肝機能障害のある人に対し、医学的知識に基づいた介護過程の展開ができる能力を養うことを目指している。

今年度は、配布資料についても更なる改善に努めた。1年次の「身体のおくみ」の復習を含め、図表や挿絵を増やし、学生が見やすく理解しやすいことを意識し改良した。また、各領域の講義終了時には感想・質問用紙を配布し、質問に対しては翌週の授業冒頭で回答するようにした。記述内容は、昨年と比較すると感想が多く質問が少ないという傾向がみられた。

授業評価は例年以上に高い評価であったが、学生が理解を深めながら、さらに具体的な質問が生まれるよう授業内容を工夫していききたいと思う。

「医療的ケアⅠ」は、介護現場において医療従事者と連携しながら、経管栄養や痰の吸引などの医療的ケアを安全に提供できるよう、基本的考え方や知識および実施手順について理解することを目的としている。

学生たちからは、特に、日常的なケアの場面から起きている医療倫理に関する問題や終末期の医療的処置に関する課題について関心の高さがうかがえる。

映像視聴やグループワークは、これから介護福祉士になろうとしている学生たちに、必要な視点・思考・対応を考えさせ、医療的ケアへの関心をさらに高めることにつながったと考える。

また、今年度も最終講にゲストスピーカーを招聘した。医療が必要な患者に対し多職種が協働するなかで介護福祉士として活躍する具体的なお話を伺うことができた。学生からは、豊かな生と死について医療的ケアの視点から考える契機になったという感想も聞かれている。

次年度以降も、現場での取り組みについて授業に含めていききたいと思う。

「医療的ケアⅡ・Ⅲ」は、経管栄養、喀痰吸引の技術演習・技術試験を主な内容とし、これに加えて用手微振動やポジショニングなど関連する技術演習も取り入れている点に特色がある。

授業評価は両科目ともに非常に良い評価であった。本科目は前期・後期と長期間にわ

たり、グループでの学習が中心である。今年度は、1グループあたりの学生数が少なく、準備・練習・片付けまで能率的に演習をすることができていた。また、真面目な性格の学生が多かったことも功を奏し、非常に落ち着いた環境のなかで協力しながら練習に励み、技術試験にも意欲的に取り組むことができていた。

次年度以降も、グループダイナミクスを発揮して効率よく学習が深められるよう、授業内容・方法の工夫に努めたいと思う。

学科：社会福祉学科 職名：講師 氏名：濱口晋

対象科目：コミュニケーションⅠ（講義）、コミュニケーションⅡ（講義）、
介護過程C（演習）、介護実習指導Ⅰ（演習）、介護福祉演習（演習）

I 授業の目標・工夫など

「コミュニケーションⅠⅡ」及び「介護過程C」授業の目的は以下の通りである。「コミュニケーションⅠ」で介護におけるコミュニケーションの基本を学習する。「コミュニケーションⅡ」ではコミュニケーション障害がある利用者とのコミュニケーションの技法の基本を身につける。「介護過程C」では、聴覚・言語障害のある利用者への介護過程の展開方法について説明できる。これら3科目を、コミュニケーション技術の基礎・応用・発展とそれぞれ位置づけて、段階的に授業を計画し実施した。

今年度も、特別養護老人ホーム等高齢者施設や障害者支援施設等障害者施設等で介護福祉実践する上で、役立つように、失語症等の言語障害や加齢性難聴等の聴覚障害について重点的に取り上げた。工夫した点は、授業の中に演習を多く取り入れた。多種多様なコミュニケーション障害を理解し、障害に応じたコミュニケーションの技法を実際にわかることができるよう、授業の中でDVD等の視聴覚教材を使用した。また、単に視聴するだけでなく、障害を持つ利用者の状態を各自が考え、判断し、適切なコミュニケーション技法を選択し、実施していくという演習を行った。

さらに、読話で実際に言葉を読み取る演習を行った。例年行っていた透明文字盤をグループで製作し、ロールプレイをした結果を発表する演習については、実施できなかったため、2年次の科目内で実施したい。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「コミュニケーションⅠ・Ⅱ」について

(I 授業のあり方 平均昨年 4.22→3.98 範囲 3.81~3.98)「(2) 授業はシラバスどおり、計画的に展開されていた」は、昨年度 4.27 であったが、今年度 3.94 と評価が低くなった。過去には「授業時間の終了時間が遅い」という意見もあったため、授業の時間配分等には気をつけて実施した。

(II 教え方 平均 4.19→3.81 範囲 3.69~3.92) (III 総合評価 平均 4.15→3.97 範囲 3.89~4.06)「(6) 教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」・「(9) 教員は、学生に対して誠実に対応していた」の項目は、『内容理解ができた』『コミュニケーションの技法が学べた』との自由記述もあり、やや改善した、『早口で話さない』『簡潔に話す』などを心がけた点がよかったと考える。今後も丁寧に説明していきたい。一方『スライドが速い』や『話す口調やタイミングによりわかりにくい』などの意見もあり、わかりやすく話すよう心掛けたい。

「コミュニケーションⅡ」についても、昨年の「コミュニケーションⅡ」に比べ、低下

した。(Ⅰ 授業のあり方 平均昨年 4.34→4.27) (Ⅱ 教え方 平均 4.23→3.95) (Ⅲ 総合評価 平均 4.35→4.15)。今年度も授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものとなるように、授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、柔軟に修正できるように改善していきたい。一人ひとりの学生により丁寧に対応していきたい。

「介護過程C」については、「コミュニケーションⅡ」を応用発展した演習を実施したが、授業内容を再検討した結果、やや改善した。授業中、体調不良の学生があり、今後こうした学生への対応や配慮に留意したい。専攻教員のオムニバス形式の授業であるため、新しいカリキュラムにおいては、教育内容そのものを専攻教員と一緒に見直しをすすめる話し合いをすすめている。

「介護実習指導Ⅰ」については、評価全体において、4.36～4.45 昨年度 4.04～4.54 に比べて若干改善した。実習指導のため、介護実習や実習施設のことが具体的にイメージできるような、わかりやすい授業を心がけていきたい。一方で、実習指導の教育内容そのものではなく、「遠方過ぎる」や「指導体制が適切でない」など、実習施設と希望施設が合っていないと感じた学生も多く、新カリキュラム検討時に合わせて、実習先の配属検討を見直していきたい。

「介護福祉演習」については、評価全体において、4.84～4.91、昨年度 4.18～4.22 に比べ、評価が大幅に改善した。令和元年度は、学力評価試験や介護福祉士国家試験の受験義務化3年目の年度であり、授業外にも、自主的に取り組む姿勢もみられた学生も増えてきた。その結果、初めての介護福祉士国家試験合格率 100%を達成した。今後も学生が自主的に継続して勉強できるような工夫を考え、実施していきたい。その一方で、発達障害の疑いがあり学習困難な学生や1年次の知識が不十分のまま、2年次や卒業を迎えている学生も増えてきたため、介護福祉士養成の教育内容や教育方法についても、必修の専門科目担当教員と一緒に考えていきたい。

社会福祉学科介護福祉専攻 助教 大石桂子

対象科目：認知症の理解Ⅰ（講義）、基礎介護技術（演習）、発展介護技術（演習）、
応用介護技術（演習）

認知症の理解Ⅰでは、介護現場での事例をもとに認知症の症状への対応や介護職としてのかかわり方などを、グループワーク、視覚教材の使用などを用いて講義した。その結果、難しい内容がわかりやすかった、という学生からの声が聞かれていた。ただし、試験を実施すると、知識不足が確認できたことから、今後は知識の定着ができるような方法を検討したい。

基礎介護技術では、教員がマンツーマンで指導したこと、デモンストレーションがわかりやすかったなどの意見が学生から聞かれた。授業内で学ぶ技術の種類が多く、授業時間外を利用して練習していた学生も多かったことから、授業量を見直し、学生の負担が多くならないように検討していきたい。

発展介護技術では、集計結果のうち「自分は、疑問点を必要に応じて質問した」という項目が他の項目と比較すると低くなるが、本科目はグループごとの技術研究であり、学生と教員間で活発な意見交換ができていたと感じている。授業時間外などで学生から質問を受けることは少なかったが、学生との関りにおいては、十分にできていたと考える。

応用介護技術では、すべての項目において、学科平均点を超えている。学生からの自由記述においても、授業内容がわかりやすいとの意見があった。教員への改善事項としては、教員の指導方法に違いがあるとのことだった。本科目は、4名の教員で実施している。授業では、統一した資料を用い、事前に教員間で内容の確認を十分しているが、学生からの質問に対し、各教員の考え方や指導方法に違いがあったようで、学生が混乱した様子であった。この点については、教員間での打ち合わせ等を今以上に行い、学生が混乱しないよう、努めていきたい。

学科・専攻：こども学科 職名：教授 氏名：小林佐知子

対象科目：保育の心理学（講義）、乳幼児・児童の心理（講義）、教育相談（講義）、
心のしくみ（講義）、発達と老化Ⅰ（講義）、教育心理学（講義）

1. 授業についての自己評価

授業によって評価にばらつきがみられた。こども学科や社会福祉学科・社会福祉専攻が受講する「保育の心理学」「乳幼児・児童の心理」「教育相談」は学科・専攻平均を上回っており、社会福祉学科・介護福祉専攻の「心のしくみ」「発達と老化Ⅰ」およびこども学科の「教育心理学」は平均以下であった。

自由記述のコメントを見ると、ほとんどが肯定的な内容であった。中には「パワーポイントが少し早い」という意見があり、一部の学生にはペースが速かった可能性がある。学生の授業態度は良く、出席率、参加意欲、コメントカード等の質・量等も概ね適切であった。

2. 今後の改善・工夫

講義のスピードなど、学生ともっとコミュニケーションを図り、理解度を確認した上で進めていく必要がある。コメントカードをもっと活用するようにしていきたい。

3. 学生への要望等

自由記述欄では「わかりやすかった」「楽しかった」というコメントが散見され、授業内容に興味をもってくれた様子がうかがわれた。ただ、もう少し質問をしてほしいと感じる。講義中に「質問は？」と尋ねても誰も質問せず、おとなしく話を聞いている学生がほとんどであった。また、本年度は後期1限の「教育心理学」をはじめ例年になく遅刻する学生が目立った。

学科：こども学科 職名：教授 氏名：永倉みゆき

個人科目：教育原理（講義） 保育・教育課程論（講義） 幼児教育者論（講義）
保育内容（言葉）（演習） 保育内容（総論）（演習）

共同実施科目：教育実習指導・教職実践演習（共同） 卒業研究（共同）

【個人科目】

I アンケート結果を受けて

前期の『保育内容総論』では、「保育について分かった」という意見がある一方で「難しかった」と感想を書いている学生もいた。

「具体的な保育場面を元に考えを深められた」とのことなので、理論と実際の子どもの姿をつなげていくことの重要性を感じた。『幼児教育者論』は、『保育内容総論』に比べると難しいと答える学生はなく、分かりやすく伝えることができたと思う。

後期の『保育内容（言葉）』は、他の科目に比べて理解度が高く、演習系の科目であったからではないか。

今年から社福・こどもと一緒に学ぶことになった『教育課程・保育計画論』は「指導案の書き方がわかった」という嬉しい意見がある一方で、課題が多いと感じているだろう学生も多くいた。

やらないことには分からないので短期大学の1年後期には大変ではあるが、仕方ないのではないかと思う。一方最後の社福2年生科目となった『保育・教育課程論』だが、進路も決まった時期で1年の頃のように保育の学びが多い時期ではないため、大変だったのではないかと思う。

「1年で習うものになってよかったと思います」と後輩への思いを書いた学生がいてその気持ちをありがたく感じた。

II 今後の改善・工夫について

演習科目については、おおよそ学科の平均に近いのでよかったのではないかと思う。16「疑問点を必要に応じて教員に質問した」という項目については、来年度も引き続き質問を引き出す工夫や質問しやすい雰囲気づくりなどを心がけたい。

講義科目「教育原理」「幼児教育者論」「保育・教育課程論」は、演習科目と同じく学科の平均に近いのでまずは良かったのではないかと思う。

【共同科目】

『教育実習指導』グループ討議、講義、模擬保育の披露等、教員も、授業形態を工夫した授業であったが、学生の「理解度の配慮して進めていた」「教員の授業に対する熱意が感じられた」が高評価なことから、目的は果たせたのではないかと思う。

他にも「添削が丁寧だった」「質問がないかその都度確認してくれてよかった」という記述があり、来年度も同様に進めていきたい。

『保育・教育実践演習』

今年で3年目になるがやり方が定着してきたと感じる。「初めにアンケートを取り、これまでの学びで分からないことやより深く知りたいことを学ぶことができ、とても良かったと感じました」という記述からも、それぞれの課題に応じた充実した学びができたことがわかった。

『卒業研究』

全体としての評価は高いが、個々の教員への意見が見られたため、今後の参考にしていきたい。

学科・専攻：こども 職名：教授 氏名：朴淳香

対象科目：「幼児体育」（講義）、「保育内容の理解と方法Ⅰ（身体）」（演習）、
「保育内容指導法（健康）」（演習）、
「保育内容の理解と方法Ⅱ（身体）」（演習）

1. 授業の工夫

「幼児体育」（講義）：各回の冒頭では、前回の授業内容を確認し、当日の授業の目的と内容を説明した。授業の流れが見通せるよう、ワーク形式のプリントを準備した。幼児期の運動発達の特性、なぜ遊びとして身体活動を行う必要があるのかなどについて、教科書に掲載の図表の中から、理解につなげやすいものを重点的に取り上げて、エビデンスから答えを導き出せるよう試みた。また、テーマによっては実習体験からのエピソードを考察し、グループ討議や全体発表を行って理解を深められるよう試みた。

「保育内容の理解と方法Ⅰ（身体）」（演習）：幼稚園・保育所・こども園で行われる子どもの運動遊びと身体表現について、実践的に学べるよう、教育環境を整えた。保育の現場で実際に活用されている遊具や教材を使い、実技を通して、内容理解と同時に表現技術が獲得できるよう、授業を進めた。子どもの興味・実態に合わせた教材や遊具の選択と環境設定を考えられるようになることを目指した。また、保育の現場はチームで協働することが求められることから、グループ活動をテーマごとに取り入れた。

「保育内容指導法（健康）」（演習）：保育内容領域健康の基本的事項を講義したのちに、事例研究を多く取り入れた。事例研究は、テーマを変えて繰り返し行い、学生自身が事例を読み解きながら、実際の保育の流れの理解や子ども理解につながるよう促し、最終的には保育内容（健康）の基本原則が理解されるよう試みた。

「保育内容の理解と方法Ⅱ（身体）」（演習）：こども園、児童館での実践の場を通して、子どもの身体表現への理解を深め、同時に保育者としての身体表現技術の獲得につながるよう心掛けた。また、保育施設で行われる遠足をテーマとして、遠足実施における目的と内容の理解、身体活動量の検討を行った。

2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「幼児体育」（講義）：幼児の体育に関する知識の習得をエビデンスからの理解と、実習等の体験を重ね合わせることを重視した。学生の授業内での発表等で知識の習得と実習体験を統合できていることが確認できた。新カリでは演習科目として行うので、演習を通して令和2年度に引き続き工夫を重ねたい。

「保育内容の理解と方法Ⅰ（身体）」（演習）：運動遊び、身体表現の教材研究を行うことにより、遊びの展開への理解が深まるよう、活動についての説明を丁寧に行った。今後は、遊びの展開への理解は子どもの主体的な活動を援助する際に必要であることに結び付けて理解を促したい。

「保育内容指導法（健康）」（演習）：事例研究を多く取り入れて、実践への理解を深めると同時に指導法を学べるよう授業を進めた。事例研究にあたり、領域健康からの視点を絞り込む見方を十分伝えられたとはいえないので、今後の課題としたい。

「保育内容の理解と方法Ⅱ（身体）」（演習）：選択科目のため、学生の取組状況に柔軟に対応することができたと思う。さらに多様な方法を学生が身に付けられるよう、内容を工夫したい。

学科：こども学科 職名：准教授 氏名：副島里美
対象科目：教育の方法と技術（講義）・保育内容（環境：演習）

【授業についての自己評価と今後の改善 ・工夫】

授業の工夫・授業の現状

どの授業も視覚的に理解しやすいように、パワーポイントで教科書の内容をわかりやすくまとめ、学生にはそれを見るだけではなく、重要な箇所を記入するような、学生用のプリントを配布した。授業では、次回の講義場所を伝え、事前学習で読んでくるように伝えているが、その学習が成立しておらず、事前の知識がないために、戸惑いを感じ、授業を把握しきれなかった学生がいたと思われる。

演習に関しては、相当と思われる課題を出し、それをシェアすることで意見の多様性を見出すことを目標にしたが、“自分でやること”が精一杯になることがあった。また、グループでの課題を出したときは、課題をこなす量に学生間の格差が生じてしまい、不満を持つ学生がいた。

今後に向けての改善

- ・なるべく教科書に沿って話を進め、教科書のどこに書かれてあることについて説明しているのかを、明確になるように進行する。
- ・なぜ今この内容をやらねばならないか、という理由を明確に示していくことで、将来につながる感覚が持てるようにする。
- ・もう少しゆっくりと授業を進めるように配慮していく。
- ・学生のプリントの書き込みの量を減らし、学生が“聴くこと”に集中できるように配慮する。
- ・学生に出す課題の量を再考し、厳選していく。

学生に期待すること

本授業で行っている内容は、どれも実際の現場で行われていることである。しかし、実際に現場に入ってしまうと日々の業務に忙殺され自分を省みたり、保育の意義について考える時間は限られてくる。また、“他者の意見”は“その場”でしかきくことができない（すばやい対応が必要）。そして、人には色々な意見がある。皆さん方が社会人（職業人）として成長していくため、大切な授業です。学生自身が多く知識を“主体的”に臨んでいただくような態度で、受講してほしいと願います。

学科・専攻：こども学科 職名：准教授 氏名：藤田雅也
対象科目：「保育表現技術Ⅰ（造形）」（演習）、「保育表現技術Ⅱ（造形）」（演習）、
「保育内容（表現）」（演習）、「図画工作」（演習）、「介護レクリエーションⅢ」
（演習）

I. 授業の目標・工夫

それぞれの授業の目標は以下の通りである。いずれの授業においても実践と理論の往還を通して、子供の成長や発達についての理解を深め、適切な指導と援助ができる、感性豊かな人材の育成を目指している。

○「保育内容の理解と方法Ⅰ（造形）」

子どもの造形活動を、日々の生活や遊びとのつながりの中で総合的に捉え、その活動を生み出す環境づくりや援助の在り方について、発達過程と照らし合わせながら理解を深める。

○「保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）」

様々な素材や用具を活用した表現技法を体験的に学ぶ演習を通して子どもの造形活動を追体験し、指導を行う上での基礎となる造形能力を高める。

○「保育内容指導法（表現）」

保育の内容としての5領域を関連させ、総合的に保育を展開するための表現領域の知識、技術、判断力、指導力を修得し、子ども理解に基づいた保育としての表現について学ぶ。

○「図画工作」

子どもの造形活動に関する知識や技能を高める。また、美しいものに目を向けたり、様々な出来事や表現に感動したりすることができる豊かな感性を身につけ、造形表現能力や実践的指導力を高める。

○「介護レクリエーションⅢ」

造形表現活動（描くこと・つくること・みること）を活かした介護レクリエーションを実践するための知識と技能を習得する。また、要介護者の立場に立った文化的な支援を行うことのできる力を養う。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

○「保育内容の理解と方法Ⅰ（造形）」

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅱ 教え方」の項目については、当科目平均点が4.90と高い数値結果であった。授業では、子どもの造形活動を育むための環境づくりや援助について体験的に学ぶ時間を大切にしたい。

自由記述には、「保育現場に出たときに生かせる授業内容であった」「子どもへの声

掛けや接し方について学ぶことができた」「説明が分かりやすくわくわくする授業だった」などが挙げられた。一方で授業内での演習内容が多く、時間が足りなかったという意見があったため、今後の改善点としたい。

○「保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）」

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。当科目平均点は、「Ⅰ 授業のあり方」の項目が4.94、「Ⅱ 教え方」が4.96、「Ⅲ 総合評価」が4.97と高い数値結果であった。

授業では、保育現場における実践事例を踏まえながら、様々な素材や用具を活用した表現活動について理論と実践を往還させた展開を心掛けた。

自由記述には、「教え方が分かりやすくてとても分かりやすかった」「毎回新しい内容でとても楽しかった」「何をつくっても先生がほめてくれて嬉しかった」などがあった。

○「保育内容指導法（表現）」

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。「Ⅰ 授業のあり方」、「Ⅱ 教え方」、「Ⅲ 総合評価」の3つの項目については、当科目平均点がいずれも4.94と高い数値結果であった。

授業では、5領域を総合的に学ぶオペレッタの制作と公演や、保育所及び幼稚園実習を想定した指導計画立案と模擬保育などを主な学習活動とした。

自由記述には、「オペレッタや模擬保育など自分たちで実際に経験することで、新たな気づきを得ることができて、とてもよい機会になった」「子どもの発達に合わせた遊びについて学ぶことができた」などが挙げられた。

○「図画工作」

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。授業では、季節をテーマとした題材や多様な素材・用具を活用した遊びや表現について理論と実践を往還させた学習を展開し、学生の実践的指導力向上を心がけた。

自由記述には、「毎時間の授業で、学生の興味を引き出す工夫がされていた」、「説明が丁寧で分かりやすかった」「苦手な図工を楽しむことができる授業だった」「オペレッタの時には、自分では思いつかないアイデアを丁寧に提案してもらえて勉強になった」などが挙げられた。

○「介護レクリエーションⅢ」

全ての項目において、当科目平均点が学科平均点を上回った。授業では、できるだけ身近にある素材を取り上げ、素材の特性などについて実践を通して学ぶ時間を大切にしました。

自由記述には、「新たな発想を知ることができておもしろかった」、「授業が楽しく、もっと授業を受けたい」などが挙げられた。

学科・専攻：こども学科 職名：准教授 氏名：松浦崇
対象科目：社会的養護Ⅰ（講義）、社会的養護Ⅱ（演習）、子ども家庭福祉（講義）、
相談援助（演習）、人間関係と援助技術（講義：オムニバス）
保育実習指導Ⅱ（演習）、保育実習指導Ⅲ（演習）

I 授業の目標・工夫など

「社会的養護Ⅰ」「社会的養護Ⅱ」は、児童福祉施設や里親制度についての概要・実際の理解を深めることを目標としています。多くの人が幼い頃に通った保育所や幼稚園と異なり、施設や里親には馴染みがないことが多く、具体的イメージがもてない、理解ができない、興味ももてない、という思いを抱えることが多くあります。そのため、授業では、DVDなどの映像資料や、施設経験者の手記、実際の里親の方の体験談を聞く機会を設けるなどして、イメージを膨らませることを心がけました。

また、「子ども家庭福祉」に関しては、最近のニュースや事件などを多く取り上げ、法制度を学ぶことの重要性や、社会の動向と制度の関連がより伝わるよう工夫しました。

「人間関係と援助技術」については、全学共通科目という特色を生かし、他学科の学生とグループで話し合う機会を多く設けるようにしました。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

結果として、全体的に高い評価をいただくことができたと考えています。

自由記述では、映像資料が参考になったという意見が多くありました。また、「説明がわかりやすく興味をもつことができた」「とても丁寧な授業で内容が理解しやすかった」など、説明の方法についても評価をいただくことができました。今後も、資料を効果的に活用しながら、丁寧な説明を心がけていきたいと思います。

また、今年度、保育実習運営委員長として、「保育実習指導」のまとめ役を担いましたが、学科平均を超える高い評価となり、安心しました。保育実習は学科の学習の中核を担うものでもあるため、今後も、学科全体で検討を続けていきたいと思っています。

逆に、「疑問点を必要に応じて教員に質問した」という項目は、他に比べて低い結果となりました。コメントシートを活用のみでなく、より意見や質問を述べやすくなるような工夫していきたいと考えています。

III 学生の皆さんに対して

概論系の科目担当が多いこともあり、どうしても、法制度中心の内容となります。実践に比べると面白みは少ないかもしれませんが、専門職として絶対に必要な知識です。これからも、社会の法制度に関心を寄せていただけると嬉しいです。

学科・専攻：こども学科 職名：講師 氏名：山本学
対象科目：保育表現技術Ⅰ、Ⅱ（音楽）（演習）、音楽、音楽通論（講義）、
保育内容（表現）

授業評価アンケートの集計結果、自由記述に対するコメント

[保育表現技術Ⅰ、Ⅱ（音楽）（山本学、カタヴァ美樹、田代千早、原川葉子、丸尾真紀子、八木名菜子、山田美穂子、鷺巣貴乃、鈴木慶子）]

Ⅰではピアノ奏法の基礎と子どもの歌の歌唱を45分間ずつ、Ⅱでは応用ピアノ伴奏法、特に子ども対象の想定で実践的な内容を45分学習し、選択音楽として45分、声楽、ギター、管打楽器、音楽療法、リトミックのいずれかを学習する。授業はレパートリーカードを採用し、独自の工夫を行っている。

集計結果は、Ⅲ総合評価では平均点をそれぞれ0.07、0.10ポイント上回った。学生の満足度を得られた要因として3つ考えられる。

一つ目は、各担当講師がそれぞれの音楽の専門分野を生かすことができる方式であり、学生にとって大きな学びであったこと、二つ目は、課題の量を授業担当者としては少なめに設定することで、学生にとってはちょうど満身に消化できる量であったこと、三つ目は、ピアノも選択音楽も学生が自分で学ぼうとするアクティブラーニングのような方式が本学の学生に合っていたことである。

自由記述においては、前回の「課題が多い」の不満は今回はなかった。

[音楽通論]

音楽史、楽典、曲の知識などを複合的、有機的に講義している。Ⅲ総合評価では平均点を0.25ポイント上回った。例えば、サン＝サーンス「動物の謝肉祭」のような標題音楽の標題を伏せて曲を聞き、作曲家と同じ視点に立って考えてみるなど、学生自身が音楽の深淵を少しでも垣間見ることができるよう工夫を行っている。初めて学ぶことが多く楽しかったなどの記述が多く、ありがたく思っている。

自由記述においては、ミュージカルシネマと音楽の関係の内容に関する関心が高い。モチーフの使用やセリフと歌のシームレスな移行は意識的に解説することで理解が高まる。

総合評価では平均点を0.27ポイント上回った。また、自由記述で「新しい世界が広がった」など好意的なコメントばかりであった。

[音楽]

本授業は、音楽の楽典知識、小学校音楽科との関連などを学習する。学科平均を0.09ポイント上回った。

自由記述では「合唱」の不満が多いので、次回から科目名も変わるためスクラップとしたい。

[保育内容（表現）]

総合評価は学科の平均点を 0.02 ポイント上回った。オペレッタの取り組み、模擬保育の組み立てなど、学生が主体的に取り組む内容が主となっている。特に、手遊びの実践が学生からの自由記述からも、役に立つと評判である。

学科・専攻：こども学科 職名：助教 氏名：名倉一美
対象科目：幼児理解（講義）、保育内容（人間関係）（演習）、
人間関係と援助技術（講義）

幼児理解（講義）では、保育実践における乳幼児と保育者とのかかわりに関するさまざまな事例を用いて講義を行った。また、保育者は自己内対話や他者との対話を通じた省察が重要であり、このことを学生に伝えるため、授業内でも積極的にグループワークの機会を取り入れ、学生同士がお互いの異なる価値観や視点に触れられるように話し合いを重視した。このことが、学生自身の学びの深まりにつながったようである。今後もこうした方法を取り入れていきたい。

反省点として、事例に対する学生の考察やグループワークの考察に対する教員のコメントの質を高めることが必要である。あらかじめコメントを用意しておくことはできないが、その講義で伝える必要がある理論的背景についてはしっかりおさえておき、それらと関連付けながら、学生自身の理解が深まるようなコメントができるよう努力していきたい。

保育内容（人間関係）（演習）では、1講義につき1テーマを設け、まずはそれについて各自で考え、その後、発表や話し合い、場合によっては教員との問いのやりとりを通して、自ら考える機会を提供し、その後、理論的解説を行った。それにより、新たな気づきをしていた学生が多かったように思う。

反省点としては、保育内容（人間関係）の理論的背景の抑えが弱く、学生の気付きに対する解説が不十分であった。人間関係という領域には、いわゆる科学的な調査によって明らかとなった社会性の発達等の知識理解とともに、「人間とは何か」、「社会とは何か」、「よりよい社会形成とは何か」といった、哲学的視点からの理解が必要であると考え。その点を教育学的視点から改めて検討し、授業内容の精査を行っていきたい。

人間関係と援助技術（講義）は教員2名の担当科目であり、そのうち「人間関係」の授業4回を受け持った。内容は、専門分野である保育に関連した講義を2回、そのほかに、対人援助職のチームワークやリーダーシップに関する講義とワークの授業を2回行った。この科目は、歯科衛生学科1年生、社会福祉学科の介護専攻1年生、こども学科2年生と、異なる専門分野の学生が同時に受講をしていたため、すべての学生のニーズに合わせる事が難しかった。特に、乳幼児や子育てに関する内容は、こども学科の2年生には既知の内容が多く、物足りなさのあった可能性がある一方で、他学科には知的好奇心をそそられなかった学生もいたようである。

ワークについては、他学科の学生同士の関わりをもつ機会として、また学生自身が「人間関係」の構築を学ぶ場として、さまざまな気づきがあったようである。今後もワークの内容の充実を図り、取り入れていきたい。

非常勤講師 氏名：厚地淳司

対象科目：現代と歴史（講義）

1, 「アンケート集計結果（科目別）」より

集計結果について、「科目属性による学科・専攻平均点との比較」を確認したところでは、ほぼ平均点に近似した傾向を示しているので、ほぼ平均的な評価を受けたものと理解している。

やや詳細に、質問番号ごとに見ていくと、「12、この授業は新たに考えたり、学んだりすることの多い内容であった。」という質問に対する回答が、平均点に比較して低得点、かつ差が大きく出ている（平均点 4.14、標準偏差 1.12）。

このような数字の出た原因としては、取り上げた教材、授業内容そのものが、学生たちの求めるものとズレがあったものと考えられる。

当然、「現代と歴史」という科目名の授業であるので、科目名と乖離した内容となることは避けなくてはならないが、取り上げる教材について、学生が求めるもの、あるいは学んだ実感を伴うものを選び直すことも必要となるものと思われる。

2, 「アンケート集計結果（科目別自由記述）」

「改善して欲しいこと、付け加えて欲しいこと」の項目で、「プリントを穴うめにしてくれるとありがたいです。」という記述があった。

学生には、毎時間、授業の最後にまとめのプリントをやらせてもらっているが、論述式の回答形式を短答式にしてほしいというものである。先述の「12、この授業は新たに考えたり、学んだりすることの多い内容であった。」に対する回答傾向を合わせて考えると、単純な事実関係に関する理解にとどまり、さらに深く、事実と事実を比較させたり、関連させたりして考察を加えていく理解を学生たちが求めているとも考えられる。

先述の取り上げる教材の選択とともに、理解の深さをどのレベルにまで達成させるのかについても改めて検討していきたい。

学科名： 社会福祉学科 職名： 非常勤講師 氏名： 飯塚哲男
対象科目： ソーシャルワーク演習 I

I、授業の目標・工夫など

1-①『 授業の目標 』

対人専門職（社会福祉士、保育士）等を目指し、クライアント（利用者等）に対する、聴く力・説明する力・質問する力・チームアプローチ（多種職協働・連携）が発揮できるようスキル習得を図りました。特に、言語・非言語的コミュニケーションを踏まえ相談援助技術（ソーシャルワーク）の倫理、価値（マインド）の基礎理解を図りました。ソーシャルワーク過程における専門用語であるインテークの面談・アセスメント（情報収集及分析）等の理解と活用方法をグループワーク演習しました。

対人援助職に不可欠なバイステックの7原則を踏まえ、共感と自己価値の学び・気づきを図りました。

1-②『 授業の工夫 』

毎回の演習開始冒頭に具体的な授業目的、目標の明示と説明を意識した。ソーシャルワーカーとして自己覚知（価値・倫理観）と共感的な理解を共通テーマとした。

高齢者、障害者、児童等の事例教材（事例レジュメ、DVD、振り返り用紙など）をグループワークで学びを中心位置づけた。学生同士や学生と講師との積極的なスーパービジョンが図れるように配慮した。

授業終了前に振り返り用紙へ記入してもらい演習効果が向上できるよう取り組んだ。振り返り用紙に関しては、毎回講師より学生ひとりひとりにコメントを記入し言語的コミュニケーションを深めた。結果、学生は自らが演習参加に対する姿勢・態度は、毎回真剣で積極的な意欲をもって参加してくれました。

II、授業についての自己評価と今後の改善点・工夫

学生評価アンケートでは、1. 授業のあり方：『授業目的、目標が明示させていた。』『授業の目的、目標から見て、授業の難易度は適当であった。』等は、4.92 評価であった。

また、II 教え方：『教員は、学生の理解が深まるように授業を工夫していた』『教員は、学生に対して質問への対応、レポートへのコメント。』等は4.83 評価であった。

学生自身の取り組み方は、『自分は、この授業を理解するために努力した。』等は、4.83 評価だった。但し、『自分は、疑問的を必要に応じて教員に質問した』が4.25 評価だった。疑問点をあえて提示して再度、内容を深める仕組みの必要性を感じた。

アンケート自由記載欄は、『演習だったので、より深く学ぶことができました。』『グループワークで今まで関わったことがない学生と話すことができその人のことも同時に知ることができた』『深く考えさせられることが多かった。

楽しい活動が多かったのが嬉しかった。』等、ソーシャルワークに対する興味・関心に繋がった意見が多数ありました。

ソーシャルワーク演習 I II IIIは通年2年と続きます。演習IIIも担当する教員としてグル

グループワーク・ライブスーパービジョンを意識した支持的機能を根底とした教育的機能がまだ不十分なところがあります。

振り返り用紙に疑問点等の記載欄を設け、生徒個々へのコメント充実やクラス全体で共有できる演習を行っていきます。

アイスブレイキング、テーマに応じた導入講義、グループワーク、振り返り用紙活用、教員同士の連携・協働し、学生にとって意欲向上となるよう努めます。

学科名： 社会福祉学科 職名： 非常勤講師 氏名： 飯塚哲男
対象科目： ソーシャルワーク演習Ⅲ

I、①授業の目標・②工夫など

1-①『 授業の目標 』

3名の講師協働におけるソーシャルワークⅠ・Ⅱを踏まえソーシャルワーク（保育士、社会福祉士等）の専門養成として、ケースワーク相談援助の過程力、グループワークにおける総合的・包括的な援助活動、相談援助実践の方法、コミュニティワークにおける地域の課題が意識できるスキル・マインド（倫理・価値）向上を目標としました。

個人・家族・地域の事例を活用したソーシャルワーク過程におけるインテーク・アセスメント（課題・ニーズ等）・プランニング・モニタリング等の理解を図りました。

コミュニティを基盤とするソーシャルワーク活動（地域住民に対するアウトリーチとニーズ把握、地域福祉計画、ネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発等）の基礎理解を図りました。

1-②『 授業の工夫 』

総合的・包括的な援助活動、バイステックの7原則を踏まえ相談援助の過程力、コミュニティを基盤とするソーシャルワーク活動等を中心にポイント明示しました。

ソーシャル倫理綱領を踏まえた価値・倫理観について振り返り総合的・包括的な援助活動、相談援助の過程力の理解を図りました。高齢者、障害者、児童等の事例教材（レジュメ、DVD、振り返り用紙など）を活用、意見交換等が促進できるようグループダイナミクスにて相乗効果を図っていきました。学生同士や学生と講師が意見交換できる時間設定し、振り返り用紙にて学生ひとりひとりにコメントを記入しました。

II、授業についての自己評価と今後の改善点・工夫

学生の演習への参加姿勢・態度が真剣で意欲をもって参加してくれた。

1. 授業のあり方『授業は、シラバスどおり、計画的に展開されていた。』『教員から与えられた課題（宿題・レポート）は、質・量ともに適切であった。』等は、4.33～4.58の評価であった。

II 教え方『教員の授業に対する熱意が感じられた』『教員は、学生に対して質問への対応、レポートへのコメント。』等は4.50評価だった。

III 総合評価『この授業の内容が理解できた』は、4.25評価だった。『自分自身は、この授業を受けて、この分野に対する興味・関心が増した。』等は、4.08評価と工夫に努めることが不可欠です。これは、学生自身の取り組み方への効果へのスーパービジョンにおける教育的機能が教員として不足している点が否めない。学生自身の身近な生活より地域アセスメントを考察し、課題解決に向けて学生同士の相乗効果が高まるよう演習事例やグループダイナミクスが図れるよう来年度に活かしていきます。

教員同士の協働と連携を強化し、学生の参加意欲と対人援助職の自覚と希望に繋がるように、ソーシャルワーク演習の内容充実にも努めます。

非常勤講師 氏名：石井拓男

対象科目：歯科衛生行政学

歯科衛生行政学に限らず、歯科衛生士学生の学習で知識の根拠とするのは、教科書が基本となります。特にこの科目は法令についての学習が求められており、単純想起レベルの学習が目標の基本となります。この目標を達成するためには、法令の本文やその背景を記載した教科書を学習するのが方法として適しています。

この授業では、教科書をスライドで写し、重要箇所を示して解説し、その解説のポイントを学生が自分の教科書に書きこむという方式をとっています。授業中に講義・解説をブロッキング（別のことを考えて、講義が聞こえてこない状態。眠ってしまって講義が聞こえない状態）してしまうと、教科書の重要箇所や記述の意味・背景が分からなくなってしまうます。メモの書き込みも出来ません。あとから教科書を読めば分かる、と思ってしまうがちですが法令の文書には意味はわかりにくいところがあります。意味が分からないと、理解も記憶もあやふやとなってしまいます。

講義のはじめと終わりに、プレテストとポストテストを行い、学生が学習状況を自己点検できる様にしています。次回の講義のはじめに、学習が不十分であったところをについてフィードバックを行うという形成的評価を行っています。

期末試験や国家試験といった総括評価に対する学習において、その根拠となる、よりどころとなるのが解説・メモが記された教科書となります。試験問題を見たときに、教科書のどこに記載されたことが出題されたのか思いだせることが大切です。

歯科衛生士は法制度に基づいて業務を行います。歯科医学が分かっただけでは、日本において歯科衛生士の業務はできません。

非常勤講師 岡村由紀子

対象科目： 乳児保育

どの学生も熱心に意欲的に取り組む姿が多くあり、充実した授業時間でした。特に授業を振り返り記入する「授業カード」は、授業の中での「一人ひとりの学び」がよく分かるもので、授業中に考えたりしたことを記入したり、毎回の返信欄でのコメントと次回の授業に生かし、授業の充実に繋げていきました。

総合評価から、保育と言う仕事への興味・関心と共に、深く考える力を持つ保育者養成を願って授業を行っていますが今年も、ねらいが一定に達せられていることが分かり、現場でこれらの力を発揮し、質の高い保育を創る保育者になることを期待しています。

授業の板書の仕方に工夫をし、学生の取り組みが一方向的にならない様、工夫をしていきたいと思っています。

非常勤講師 氏名：金美連

対象科目：国際関係論（講義）

I 授業の目的・工夫など

本講義では、国際関係の歴史と現状を良く理解することを目的とした。前半では、第二次世界大戦以後の国際関係の構造、その変容過程を歴史的に概観した。後半では、国際社会における主要問題である環境汚染や、南北問題、民族紛争、人種差別といったテーマを取り上げた。

高校で世界史を履修しなかった学生たちを考慮し、国際関係の歴史と現状を幅広く取り上げながらも、分かりやすく教えようと心がけた。また授業への理解を深めるために、毎回プリントを配り、スライドやビデオを活用しながら授業を進めた。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

当科目の授業評価アンケート集計結果は、学科・専攻平均点と類似した結果であった。セクションⅠ「授業のあり方」、セクションⅡ「教え方」は学科・専攻平均点とほぼ同じであり、セクションⅢ「総合評価」は学科・専攻平均点を上回る結果であった。ただ、セクションⅣ「あなたの取り組み方」は学科・専攻平均点を下回る結果であった。とりわけ、問16「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」が低い評価であった。

受講生が少なかったため学生たちと意見交換をしながら授業を行っていたつもりであったが、時間に追われ一方的な説明で終わったことも多々あったと反省する。

来年度は学生たちがより自由に意見を述べたり、質問したりすることができるように心がけていきたいと考える。

セクションⅢ「総合評価」は、すべての項目において学科・専攻平均点を上回っており、授業内容の理解はある程度達成できたと思われる。今年度も受講者全員が女子学生であり、彼女たちは政治や経済より文化に関心があるので、所々文化の話を取り入れながら興味を持って授業に臨むことができるように心がけていた。しかし、日々目まぐるしく変わる世界の情勢を客観的に理解することは容易ではない。

学生たちが国際社会の現状を正しく判断できるようにするためには、視聴覚資料を効率よく用いるなど、授業方法への工夫がより必要であると考えます。また一方的に知識を提供するだけでなく、学生たちの積極的な授業参加を促すために、学生たちが自ら調べ発表する機会も設けたい。

これらの点を改善して、来年度はより活気ある授業にしていきたいと考える。

非常勤講師 氏名：久保幸恵

対象科目：社会調査の基礎（講義）

自由コメント欄に、「もう少し先生がパソコンなどの使い方を、理解していたほうが良いと思いました」とありました。言い訳をさせてもらおうと、情報処理室のパソコンが全て新しくなっており、ログインの仕方など、前年度とは非常に異なったシステムになっていたために、授業中に混乱が生じてしまいました。

私は非常勤講師で、この授業以外には大学を訪れることはなく、授業が始まった後でしか、新しくなったパソコンとシステムに触れる機会がありませんでした。東京に住んでいるため、授業時間の前後以外に大学を訪れることは現実的ではありません。また、パソコンの設定の影響なのかどうかはわかりませんが、学生のみなさんが使うパソコンにおいても、1台を除いて、マイクロソフトのアカウントにアクセスすることができなかったことから混乱が生じました。

マイクロソフトのアカウントを持つことを学生さんたちに勧めたのは、大学のパソコンではワードやエクセルから直接にワンドライブに保存することが可能となっているために、便利だろうと考えたためです。けれども、情報処理室のパソコンでは、なぜかアカウントにアクセスできない、という事態が発生してしまい、混乱を招きました。私としても、非常に残念です。

次年度からは、ドロップボックスのアカウントを作るなど、パソコンで作成したファイルの保存方法を変えるつもりです。大学側への要望としては、情報処理室のパソコンが新しくなり、ログイン方法も変更されたことを、授業が始まるよりも前に教えておいていただきかったです。また、以前には情報処理室にスタッフの方がいらして、学生のログインなどの作業を手助けしていただきました。今は誰もいらっしゃいません。

情報処理室のパソコンの設定に詳しいスタッフの方がいてくだされば、状況は変わったかもしれません。どなたかが常駐してくださることはできないのでしょうか。

また、私がこのアンケート調査とは別に授業中に書いてもらった調査では、授業中に授業とは関係のない学生さんたちが情報処理室に入ってくることを不快に思う方々がいることがわかりました。次年度からは、授業時間には他の学生さんたちが入室することを禁止するよう、大学に要望するつもりです。

非常勤講師 繁原幸子

対象科目 『地域文化論』

地域文化論は方言や歴史や習俗、生業と様々な切り口で論じることができるが、毎回民俗学の手法で地域の文化を論じている。

民俗学という学問は広範囲のことを研究する学問であるので、民俗学で読み解くという方法が一番わかりやすいと思われる。

しかし民俗学の手法での講義はどうしても戦前の日本の習慣や信仰、風習などを中心として日本という国の文化を探ることになるので、わかりやすく話し、より身近な近年の地域例と行事などの説明が必要で、毎回苦心している。この科目は内容に興味を持てる学生と全く興味を持ってない学生がいるようで、コメントシートの書かれている内容を見ただけで、かなりの差を感じることもある。

興味を持てる学生は両親や祖父母の話をよく聞いている学生で、自分の家ではこんなであるとか、自分の父親がいかに地域の祭礼にのめり込んでいるかなどのお話を細かく書いてくる。

また祖父母の時代の話などもよく聞いていて、自分の住んでいる地域のことについて、実に詳しい学生もいる。そうした学生は話が良く理解できるが、そうでない学生に対しては毎回様々な工夫が必要になる。例えば年中行事の正月の項目だが、餅は食べない、正月行事等何もしたことがなく、元旦からトーストで普通の朝を迎えるという学生がいる。初めは驚いたが、聞けば毎年そんな学生がいるので、それ以来、世間では年末から正月にかけてどんなことをしているのか等ということから説明している。その上でなぜそんなことをするのかという意味を説明している。

初めからわかっている学生にはそんな常識的な話は無用で、時間の無駄に思われるのではないかと思うのだが、そこをこちらが常識と思って省くと理解できない学生が出てくることは毎回のことである。

老人施設や子供の施設や様々な場に出て、宇宙人かと思われる職員にならないように、地域の行事や習慣の基礎知識を覚えて卒業してもらいたいと思う。そのために、来年度もパワーポイントを多用し、身近な事例で分かりやすく根気強く説明していきたい。

非常勤講師 氏名：末永美雪

対象科目：栄養学・歯科栄養学（講義）、生活支援技術Ⅱ（講義）、
生活支援技術Ⅲ（実習）

生活支援技術Ⅱ（講義）について

授業アンケート集計結果はほぼ良好であった。しかし、本科目が歯科の専門科目ではないため、学生の積極性は低かった。授業態度は概ね良好で、静かに講義を聞いていた。レポート課題提出状況も良好であった。

今後の改善・工夫は教科書の変更である。いまの学生がより分かりやすく理解しやすい教科書を得られたので、積極的取り組みに効果があると期待している。

生活支援技術Ⅱ（講義）について

授業アンケート集計結果は残念ながら良好ではなかった。その理由として、2冊の教科書を横断的に使用して授業を行っていたからと思われる。より多くの知識、より深い理解を期待していたが、学生にとって過重な負担があったと推察される。学生の質・理解度に応じた授業運営のために、今後授業で使用する教科書は1冊とし、他は課題の際に参考資料として自由に学ぶ方向に変更することで改善したい。

学生側の問題として、数名の学生の遅刻・欠席・途中退出等があり、対応が難しかった。課題提出も期限が守られていないことがあった。

生活支援技術Ⅲ（実習）について

授業アンケート集計結果は大変良好であった。全ての項目で学科平均を上回っていた。（4.79～4.84）。学生の取り組みも4.84と大変良好であった。前期の生活支援技術Ⅱ（講義）での取り組み姿勢に問題があった学生も、誠実に積極的に授業参加し、全くトラブルがなかった。むしろリーダーシップを発揮して、円滑な授業運営に協力的であったのは授業担当者として大変うれしく思った。グループワークでも全員が協力的で、概ね授業時間内で授業終了できた。

学生側の問題としてユニパをし忘れる学生が一部見られた。2時間続きの授業のため、3講時前にユニパをするように促したが、し忘れる学生がいた。1人ユニパを全く携帯しない学生がいた。出欠の誤りを防ぐために出欠確認方法を独自に追加した。（10回から教員による氏名読み上げを同時に行った）。

今後の工夫は、食生活を支援する立場としては、学生の調理経験、文化的知識が乏しいので、それを充足し生活支援者としての資質を高めるため、外部団体の協力を得て日本料理専門家による出張講義を一部組み入れることとした。それにより食文化の深い理解だけでなく、支援の際の心構え、調理技術向上等複合的教育効果向上を目指すこととする。

非常勤講師 氏名：杉山弘卓

対象科目：福祉経営とリーダーシップ（講義）

I 教員のコメント

質の高いケアを提供するには、介護スタッフの個人レベルで介護技術が高いだけでは実現できません。介護スタッフが働く、法人や事業所（広い意味での環境）に関心を持つ必要があります。例えば、事業所の掲げる理念や介護観、あるいは職場スタッフ同僚との人間関係。またスタッフの健康を守る事業所のセーフティネット等々組織の質がケアの質に関係しています。

この科目は、「マネジメント」をキーワードに曾根允先生と分担し、杉山は組織（法人・事業所）の視点から、質の高いケアの実現を考えていきます。また、現場に起こりがちな場面の事例をグループディスカッションする事で、リーダーの役割やメンバーシップ、チームワークについて深めています。

できるだけ実例を取り上げ、介護実習体験からもイメージしやすい授業展開を試みていますが、より学生の理解度に配慮し授業を進められる工夫をしていきたいと授業評価アンケートの集計結果から考えています。

非常勤講師 氏名：瀬戸知也

対象科目：教育社会学（講義）

1. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫について

・「授業のあり方」及び「教員の教え方」については、一定の肯定的な評価が得られている。ただし、「学生の理解度に応じた授業の進行」については改善の余地があることがわかった。今後は、講義内容をより精選し、学生にとって質・量ともに無理のないものとし、授業方法も学生の理解度により応じた方法を選ぶよう改善・工夫したいと考えている。

・「学生の取り組み方」についても、一定の肯定的な評価が得られている。しかし、授業内容に関する「疑問点」を必要に応じて「質問」したか、という項目については、改善の余地があることがわかった。

今後は、授業内容に関する学生の「疑問点」を積極的に「質問」できるような支援の仕方を工夫したいと考えている。

・授業で取り上げた映像教材については、肯定的な評価が多くみられたため、次年度についても、引き続き、映像教材の積極的活用を努めたいと考えている。

2. 学生に期待すること：

・授業の内容に関心をもった場合は、授業で提示された事柄の理解にとどまらず、そこで生じた疑問や興味関心を大事にしてほしいと思う。

授業は、当該領域における様々な問題の所在を知ってもらうためのものであり、学習の出発点である。

学生にとってより重要なことは、授業を受けた後に、授業を受けて疑問に思ったことや興味・関心をもったことを、自分の力で納得のいくまで追究していくことである。そこを大切にしてもらいたい。

非常勤講師 氏名：曾根允

対象科目：福祉経営とリーダーシップ

2019 年度に初めて非常勤講師として登壇させていただきました。学生からどのような評価が返ってくるのか不安もありましたが、おおむね高い評価をいただき、安心していきます。

本科目「福祉経営とリーダーシップ」を杉山弘卓氏と分担し、私は「リーダーシップ」、「チームマネジメント」「キャリアデザイン」のテーマを担当しました。テーマの性質上、グループワークを多く取り入れながら進めました。まだ就職前の学生には「職場でのチーム・リーダーシップ」がイメージしがたく「他人事」になってしまうのではないかと考え、座学以外にも個人ワークとグループワークを多く取り入れて主体的に学べるように工夫しました。

具体的な一例としては、学生自身のこれまでの「チーム」での経験（部活やアルバイト）を「自分事」として振り返り、そのチームの特性や良かった点等を言語化（ワークシートに記入）し、それをグループメンバーに紹介しあうといったワークを行いました。また、ゲーム形式のグループワークを通じて、チームワークやリーダーシップの大切さ、自身のチームへの関わり方の傾向を体感的に学んでいただきました。一方的に授業を行うのではなく、参加型ワークと座学を関連づけながら授業を組み立てることを意識しました。

アンケートの評価や授業中の反応も概ね良く、大半の単元で学生は集中して参加・聞いてくれていました。グループワークでの発言や発表内容も、こちらの期待以上の質の高さに驚き、今後の介護業界の一翼を担っていける貴重な人材であると感じました。

しかしながら、一部「キャリアデザイン」をテーマとした単元では、入職前から「キャリア」など想像がつかないのか、居眠りをしてしまう学生が多くなってしまいました。より学生が身近に感じられるように工夫するとともに、テーマの配分を再検討し、より有意義な授業にできるよう努めてまいります。

非常勤講師 氏名：中尾健二

対象科目：現代と哲学

数値化されたデータは学科専攻平均点とほぼ等しいか、やや良いくらい、グラフだと違いがわからないくらいで、その点ではまあまあだったのかなと思う。

この年度は韓国映画を5本選び、その歴史的背景を解説し、鑑賞の予備知識としてもらった上で、映画を鑑賞した。その意義についてはとくに話さず、受講生自身に考えてもらうようにした。最初の3本は観るごとにミニレポート書いてもらい、後半の2本は期末試験でレビューを書いてもらった。解釈の基本的枠組は外してない、つまりとんでもない誤解などはきわめて少なかったようである。担当者の目論見はおおむね達成されたと考えている。

「改善してほしいこと」では、圧倒的に英語字幕の作品に不満が集中した。1本は日本版ディスクが発売されておらず、韓国版（英語字幕付き）を使用せざるをえなかったのも、事前に字幕の英語をプリントし、日本語訳をしてから視聴したが、それでもダメだったようだ（字幕の英語はきわめて平易で中学校レベル）。

もう1本は日本が舞台となっている作品でほぼ半分が日本語、残り半分が韓国語、この韓国語の部分に英語字幕がついている韓国版ディスクを使用した。これはその後日本版ディスクが発売されたので今後はそれを使用するようにしたい。日本版ディスクがないものは、なぜそうなっているのかまで考えをめぐらしてほしいものだが、ないものねだりだろうか。ある種のテーマであると自主規制、つまり事実上の検閲が作動してしまっているのが嘆かわしい日本の現在の文化状況なのである。

中学・高校での歴史教育では、20世紀まで手が回らないという話はよく聞くけれど、受講生の反応を見ているとまさにそんな印象をうける。とくに日本と関係の深い隣国の出来事についてほとんど知識がないようようである。それを多少は補完できたことは良かったのではないか。映画の中で展開される具体的な出来事を通じて、さらに自分の人生や社会について考えを深める一助になればと思う。

非常勤講師 氏名：橋本和彦

対象科目：臨床検査法

I. 授業の目標・工夫

医療は臨床検査から始まり、検査結果に基づいて疾病の診断を行い、診断に基づいて治療を行うという流れがゴールドスタンダードである。つまり、臨床検査とは医療の根幹をなす重要な医療行為である。本授業においては臨床検査の意義を理解し、歯科医療に関係の深い一般的な臨床検査項目を中心に、その検査方法と結果の解釈を学ぶことを目標としている。

授業では単に臨床検査項目と検査基準値を覚えさせるだけではなく、まず病理学・口腔病理学の知識を基盤とした疾患の総論から解説し、学生の臨床検査に関する理解を深められるよう工夫している。また画像やイラスト、動画を用いて、臨床検査の実際に関する具体的な説明を行うように努めている。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

昨年度の学生から受けた指摘は以下のごとくである。

- 1：レジメ空欄が分かりにくい。
- 2：記入が終わっていないのに次のスライドに進んでいく
- 3：スピードが速い

臨床検査法は多領域にまたがり、その種類も多岐にわたる。検査項目に関連する疾患の総論から検査各論までを説明すると内容が盛沢山になってしまい、結果、授業スピードが速くなってしまった結果の2、3の指摘と思われる。2、3に関して、本年度は授業容量を抑えたため、改善されたと考えられる。

1に関しては配布資料と授業スライドの修正を行い、本年度は1と同様の学生からの指摘はなかった。以上より概ね昨年度における反省点の改善は、適正に行われたと考えられる。

また本年度は、ポストテストを導入したことにより授業の要点が明確化され、学生の理解を深めることにつながったと考えられる。ただし、授業容量の調整に関しては改善の余地があり、来年度の課題としたい。

III. 学生に期待すること

基礎疾患を持つ患者は増加の一途をたどっている。そのような患者に安全な歯科医療を提供するためには、全身疾患の基礎知識を有し、患者が提示した臨床検査表を読み、客観的かつ正確に患者の状態を把握しなければならない。

本授業で得られる知識は、資格取得後の現場において必要なものばかりであり、ぜひ積極的に学習していただきたい。

非常勤講師 氏名：原川 洋子
対象科目：介護レクリエーションⅡ

授業では、音楽を活用したレクリエーションを企画しグループワークを実施する際、利用者が楽しく活動に参加する為の援助法を学び活用できる様になる事を期待しています。

具体的には、『①利用者の馴染みの曲を知り、選曲に役立てる。②音楽レクリエーションに適した楽器の活用を知る。③利用者の状況(身体面・認知面・精神面)に合わせた援助を学ぶ。』です。

実践的なワークショップとリアクションペーパーを取り入れた双方向の授業方式で、アンケートの自由記述では「発表が楽しかった。知らなかった昔の曲を知ることが出来、レクリエーションの進め方を学べた。」等、学生の積極的な取り組みが見られましたが、一方、学生自身の取り組み欄では、意欲や疑問点の質問について「どちらともいえない」との回答もありました。

毎回、リアクションペーパーの質問には随時回答しましたが、単なる簡単な感想のみの記入も見られました。具体的な利用者を想定して『どのような音楽の活用や援助が利用者の参加意欲の向上に繋がるのか?』という視点でワークに取り組んでみると、自分自身の課題として問題がとらえられると思います。

共通の課題は授業時に改めて解説するので、疑問の解決にリアクションペーパーも有効に活用してください。

非常勤講師 氏名：前原ひとみ

対象科目：日本経済論（講義）

1. 授業の目標・工夫など

本科目では、経済の基礎的な知識を身に着け、日本経済についての現状や課題を理解し、自分の意見を持てるようになることを目標としていた。講義の前半では、経済学を身近に感じてもらうための導入として、日常生活における経済活動や時事問題、経済学の歴史を取り扱った。講義の後半では、主に戦後から現代までの日本経済の歴史を取り扱い、歴史の移り変わりや、現状の日本経済の課題について検討した。

授業の工夫としては、毎回配布する穴埋め形式のレジュメをもとに授業を行った。レジュメに従って授業を進めながら、適宜レジュメの空欄に入る語句を板書した。スライドで示すのではなく板書をすることで、学生の記入速度に合わせるように努めた。

また、授業の補足資料として、統計データや、新聞、漫画資料、イラスト付き解説書、映像資料などを適宜使用しながら、より授業内容の理解を深められるように努めた。授業評価アンケートの自由記述欄では、「毎回穴埋めプリントやビデオを使用して分かりやすい授業だった。特に漫画資料によって一層理解が深まった」という意見もあり、今後も分かりやすい補足資料を用いていきたい。

さらに、全体を通して3回の小テストを行い、その都度学生に復習を行うように働きかけた。小テストと合わせて、コメントシートを使用して授業での感想や疑問点を聞き、翌週の答え合わせの際にスライドや資料を使用して学生の疑問点に回答することで、より深い理解と関心を促すように努めた。

2. 授業についての自己評価と今後の改善など

授業評価アンケートでは、「Ⅰ. 授業のあり方」、「Ⅱ. 教え方」、「Ⅲ. 総合評価」はどれも学科・専攻平均点を上回る結果であった。しかし、「Ⅳ. あなたの取り組み方」については、学科・専攻平均点を0.04点下回る結果であった。今後の授業では、より授業に積極的に参加してもらえるように、授業内の教師と学生間のコミュニケーションを深め、意見交換が活発に行えるようにしていきたい。

また、映像資料に関しては、授業の時間配分の関係で上手く使いこなせず、用意していた映像を見せることができないことも多かった。そのため、今後は授業の時間配分にも十分に配慮し、視覚的にも分かりやすい授業を行っていきたい。

授業評価アンケートの自由記述欄では、「日本経済について知り、経済の面白さに気づくことができたので、今後も勉強を続けていきたい」という意見もあり、教える側として大変励みとなった。今後も学生に対して、これからの日本経済について関心を持ち、自分の意見を持てるような講義ができるようより一層尽力していきたい。

非常勤講師 氏名：森 正次
対象科目： 歯科口腔外科学

「歯科口腔外科学」については、「歯科衛生士教育に必要な科目」としてではなく「臨床外科学の一部」と位置づけし、その結果として多くの有病者が抱える循環器疾患や糖尿病或いは骨粗鬆症など全身疾患との関係は、重視せざるを得ないものであった。

また「周術期口腔機能管理」の概念が導入され、全身麻酔下の手術やがん化学療法・放射線療法の際に歯科衛生士が口腔内診査、口腔衛生指導、そして除石などの処置を行なうことは、今や医科（他科）の治療に欠くことのできないものとなってきている。

さらに骨転移を来す乳癌・前立腺癌・肺癌などについては、BP 製剤をはじめとする骨修飾薬を通じて（口腔領域以外の）進行期/緩和期のがん治療に直接接し寄り添うことになるが、ここまで到ると最早「歯科の領域」に止まらず、広く「医科の領域」に踏み込まざるを得ない。

このような現状を踏まえて講義では大きく3点を特徴にした。

まず1点は教科書的な口腔外科の内容はあくまでベースとして位置づけ、その上に立って実際の臨床症例をなるべく多く扱い、その後の臨地実習はもとより実際の臨床の場に生かせるような内容とすること

2点目は全身疾患の解説、口腔粘膜疾患や歯周病と全身疾患との関わり、口腔ケアや周術期口腔機能管理にも十分な時間を当てること

3点目は、個々の断片的な知識の網羅、一方向的な蓄積だけではなく、解剖学、病理学、生理学、生化学などのベースから、その源流にある本質的な概念、原理、メカニズム、などを有機的に integrate させることであった。

（具体的には歯原性上皮の概念、骨のリモデリングと骨吸収、再生医療、がん免疫療法などを主なテーマとして取り上げた。）

このようなコンセプトで、しかもその一方では卑近な話題も取り入れるなど工夫を凝らした結果、アンケートを見る限りある程度の学生の興味、モチベーションを惹起或いは上昇させることができたように感じている。

但し限られた時間数に対しての内容は豊富過ぎ消化不良気味であったり、内容そのものが高度になり過ぎて、むしろ過重負担として学生に重くのしかかったことは十分憂慮される。

来年度に向けて様々な観点から熟慮し試行錯誤しながら、新たな内容構成に改変する模索は必要不可欠と考えている。